

ロバート・リーチ 『パンチとジユデイ…歴史・伝統・意義』

訳：岩田 託子

解題

以下に、Robert Leach, *The Punch & Judy Show: History, Tradition and Meaning* (London: Batsford Academic and Educational, 1985) の第一章、第四章を日本語に訳出している。原書は十二章、文献目録・インデックスをふくめ一九二頁（二四五×一八五）。全訳をめぐし順次掲載を予定しているが、前書きと謝辞は割愛した。英国で三五〇年以上の歴史を持つ人形劇パンチ&ジユデイの、まさに副題どおり「歴史・伝統・意義」を解き明かす本書は、社会背景・文学や他の演劇、美術などとの関わりも、当然視野に入れている。初版発行は一世代前になるとはいえ、この分野における研究の到達点であり、研究者にとっては必読書である。書物として残されたパンチ芝居の最初の例を、一八二七年に遡って解きほぐす冒頭は、読者を引きこむ。魅力的な構成である。著者は、一九七四年からパーミンガム大学で演劇を講じた大学人であると同時に、舞台制作に実際に関わってきた演劇人としてのまなざしが随所に込められている。

第一章

一八二七年のある日のこと、とあるパンチ上演者を男三人が訪れた。こよなく民衆に愛される人形劇「パンチ&ジユデイ」の本をつくるうというのだ。三人の男とは、文筆家のジョン・ペイン・コリアー、美術家のジョージ・クルクシャンク、そして出版者のエドワード・ブラウイトである。パンチ上演者の名はジョヴァンニ・ピッチーニといった。できあがった本は『パンチ&ジユデイの悲劇的喜劇もしくは喜劇的悲劇』。史上初めて台本が記録されたのだ。¹

ピッチーニが「ロンドンおよび各地で上演を」²始めてすでに四、五〇年の月日が経っていた。クルクシャンクは、この「年配のイ

タリア人」を次のように描写している。

ピッチーニはドルリー・レーンのコルヤードにある、キングズ・アームズと看板のかかった安パブ（1図）に居を定めていた。朝に上演することになり、二階の窓枠の一つが取り外され、パンチ劇場となる箱舞台が集会室に運び入れられた。

上演中クルクシャンクは「何度か見せ場で止めて人形をスケッチした。コリアーのほづはセリフを書きとっていた。」³
登場すると、パンチ氏はまず観客にむかってお辞儀をし、短い口上を述べ上演が始まる。

紳士淑女のみなさま、いかがお過ごしでしょうか。

みなさまご機嫌うるわしければ、手前どももまたご機嫌

さてしてお立合い。手前どもがささやかなる芝居。

お笑いだだければ、お代も結構。

ピッチーニのアクセントを写すために工夫したのか、台本全体にかすかなイタリア語調がある。「マルブルークは戦争に征く」「訳フランスの俗謡。替え唄も多数あり英国でもなじみぶかい」の節まわしで歌いながら、うやうやしく登場する。

パンチ氏は 大いに気のいい輩、

赤と黄の衣装をつけて、

たまに浮かない気分するときも、

素敵な友に囲まれているさ、

気前いいこと この上なしで、

楽しく たらふく 食いたただけで

娘っ子相手に めかすは、すかすは

できるかぎりは贅沢さんまい

死んじまえば——それまでさ

その時パンチの喜劇もおしまい

あとに続く上演は、この唄を人生哲学として実際に展開したものである。

パンチはジユディを呼ぶが、トービーという名の犬が登場してパンチに咬みつく。パンチが反撃すると、犬はパンチの鼻にくらいついてくる。滑稽なやりとりがしばらく続いた後で、ようやく犬は逃げていく。「可哀想な鼻」を撫でながら、パンチはトービー犬の飼い主スカラムーシュ「訳註 十六世紀末のナポリに生まれたコメディア・テラルテの道化」を呼びだす。棍棒を持ったスカラムーシュは、「やいパンチ、俺さまの愛犬に何しやがった」と問いただす。パンチは舞台袖に引っこんで、スカラムーシュが手に持つものに探りをいれる。

スカラムーシュ ヴァイオリンさ

パンチ ヴァイオリン？ヴァイオリンとは素敵じゃないか。ちょっと弾いてみておくれ。

スカラムーシュ こっちにおいで。そしたら弾いてやるからさ。

パンチは自分が弾いてみようと言い出して、「マルセイエーズ」「訳註 フランス国歌」をハミングしながら、スカラムーシュの帽子の高いてっぺんを棍棒で殴りつける。スカラムーシュは棍棒を奪い返し、同じく「マルセイエーズ」をハミングしながらパンチの後頭部にガツンと一発お見舞いする。お次はまたパンチの番で、今度は「踊りながらスカラムーシュの背後に忍びより、一撃のもとに首をぶつとばす。」大はしゃぎでパンチは勝鬨かちどぎをあげる。

さてさて、この唄はお気にめしましたかな？調べは甘いか酸っぱいか、ええっ？ へっ、へっ、へっ！

パンチは棍棒を放り投げ、勝ち誇って踊りだす。

あまりにしつこくパンチが呼ぶので、次にジユディが登場する。

ジユディ はいはい、ただいま。どうしたの？ここですよ。

まずパンチがせがんで「キッス！とろけるようなキッス！」をジュディにするが、ジュディはパンチの顔をはたく。次にパンチは赤ん坊を連れてくるように云う。ジュディは云われたとおりにする。赤ん坊とパンチが二人きりになると、パンチは唄を口ずさみながら「つかまった！つかまった！」をして遊ぶ。ところが赤ん坊は泣きだしてしまふ。どうやら、おもらしをしたようだ。パンチは怒り狂って赤ん坊の頭を舞台の枠板に何度も叩きつけ、あげくのはてに観客めがけて赤ん坊を放り投げてしまふ。(38図)「へっ、へっ、へっ！」の高笑いもやまず、パンチは踊り歌う。

再登場したジュディは、パンチの云い逃れにもかかわらず、何が起こったかを察知してすすり泣くが、パンチはいつこう気にかけない。

またすぐに次の子をこしらえてやるからな、ジュディ。ここからもつとな。

飛び出していたジュディは、棍棒を手に戻りパンチをしたたか打ちつける。もみあいの末にパンチが棍棒を奪い、今度はジュディをしたたか打って、ついにはジュディを死に至らしめてしまふ。パンチは「棍棒の先で死体をすくって放りだし」哄笑する。

へっ、へっ、へっ！女房なくすは大儲け。

(歌って)女房なんて、まっぴらさ

逃げるが勝ちよ

縄ござい刃物ござい

棍棒ございの俺さまさ。

この時、麗しのポリーが登場し、ちょっとした踊りを始めるが、それにあわせてパンチが歌う(『乞食オペラ』より)。

男の心が不安で掻き乱されても、

女が現われると雲は晴れる……ふん、ふん。

麗しのポリーはパンチの周りをぐるぐる踊り(137図)、パンチも一緒に踊り始めるが、音楽はますます速くなり、ついにはパンチは

「その腕に麗しのポリーをかかえ、あらん限りの音をたててキスをする。麗しのポリーのほうは『満更でもない』様子」。踊りながら二人は退場するが、パンチの唄が聞こえてくる。

ソロモン賢王のお妃さまをみんな頂戴しても、麗しのポリーのためには皆殺しさ。

ここで「廷臣のような人形」が登場し、ゆったりとした節まわしで歌い、おごそかに踊り、帽子を片手で取る（これは「他の人形遣いたちの追隨を許さない」ピッチーニの見せ場らしい⁴）。するとみるみるうちに人形の首がずるずる伸びて、ついには頭が沈みこみ、人形は隠れてしまう。

パンチ再び登場。麗しのポリーに会いに行くために、持ち馬ヘクターを連れてくる。すったもんだの末に、馬がパンチを放りだす。自分が瀕死と思ったパンチが医者を呼ぶ。「どこが悪いか」と尋ねる医者。「頭を診ながら」この辺かな？」

パンチ いや、もつと下。

医者 ここですか？（胸を診ながら）

パンチ いや、もつともつと下。

医者 ではこのあたりですか。（下へと診ていく）

パンチ いや、まだまだ下。

医者 えっ、なに？ 恰好いい脚でも折れましたか？

パンチ いや、もうちょつと上。

（医者がパンチの脚にかがみこみ診察しようとするやいなや、パンチは医者の眼に蹴りを入れる。）

医者は一旦退場し、棍棒を手に再登場。「そこに何を持つてるんだ？」と聞くパンチに「お見舞いだ、パンチ君」と殴りかかる。そこで棍棒の丁々発止。お互い「お見舞い」しあうが、医者がついに倒れて死に至る。パンチは「またもや棍棒の先で死体をすくいあげ放りだす。「へっ、へっ、へっ、へっ！」と哄笑するパンチ。「さてさてお医者さま、できるものならご自分をお見舞いなさるがいいさ。」パンチは踊り歌いつづける。

次にはパンチは羊用の大きな鐘を持ってきて鳴らすがお仕着せ姿の黒人召使に制止される。その召使のご主人さまが騒音にたまりかねて、余所でやるようにとパンチにおっしゃるのだ。「さっ、その鐘ともども消えちまうとくれ。」「どの鐘かね？」これは鐘ではなくオルガンだとパンチは云う。それではと召使がオルガンと呼ぶと、「オルガンだって」とパンチ。「これはヴァイオリンというものだ。見えんかね。」召使がそれではヴァイオリン、と云う。パンチは今度は太鼓だと云う。召使が合わせると、パンチは喇叭と云う。「鐘でもオルガンでもヴァイオリンでも太鼓でも喇叭でも、なんであれともかく、うちの主人さまがお気に召さないのだ。」くたびれはてて召使は云い捨てる。「鐘でもオルガンでもヴァイオリンでも太鼓でも喇叭でも、なんであれともかく、このパンチさまが貴様のご主人さまは馬鹿だというのさ。」とパンチは云い返す。これをきっかけに、くんずほぐれつの取っ組み合いとなるが、最後に勝利をおさめるのはパンチである。「この音のほうがいいか？」と召使を殴りながら尋ねる。

これは俺さまの鐘（一発）、これは俺さまのオルガン（一発）、これは俺さまのヴァイオリン（一発）、これは俺さまの太鼓（一発）、そしてこれは俺さまの喇叭とくりゃあ（一発）。ほづら、貴様のための大合奏だ。

そこによたよたのお盲さんが、お恵みを乞いに登場する。パンチの家の扉を叩いているうちに、はからずもパンチの頭を叩いていた。恵むものなど何もありません、とパンチはそっけない。「せめて半ペニーでも」とお盲さんは哀れっぽくせがみながら、咳きこんでしまい、痰を吐いたところがパンチの顔だった。「なんかね？俺さまの顔は痰壺なみに汚いつてわけ？」パンチは喧嘩腰で乞食を追い出してしまふ。

そしてまたもやパンチが歌い踊りしていると、警官がスカラムーシュ殺し容疑で令状持参でやってくる。パンチはその警官もぶちのめし、また歌に踊りとなる。そこに登場した官吏は「妻と子を殺したかどで連行するぞ！」と告げる。「貴様こそぶちのめしてやる」とパンチはこたえ、やつつけてしまふ。またまたパンチは踊り歌いを続けるが、今度はそこに、首吊り役人ジャック・ケッチ〔訳註？一六八六年 ジョン・ケッチともキャッチとも呼ばれる。死刑執行のやり方が拙劣で悪名高く、死刑執行人の異名となつた〕が現われ、パンチを医者殺しで告発する。「さあ牢獄まで来い。吾輩の名はケッチ。」「ケッチだと？けっ！ちっ！これでもくらくらえ」と叫びながらパンチはケッチをぶちのめす。ところが、警官と官吏とジャック・ケッチが三者三様パンチをなんとか取りおさえ連行できた。

場面はかわって獄中のパンチだが、「鼻を鉄格子に擦りつけたり、のぞかせたりしている」（122図）。ジャック・ケッチが絞首台を持ってくる。パンチはケッチを木を植える庭師に見立てようとする。警官が絞首台に梯子をかけるのを、パンチはリング泥棒と誤解

したかのように「こら泥棒！」と叫ぶ。二人の男が棺桶を運びこむが、パンチはそれを果物籠でもあるようにふるまう。ジャック・ケッチはパンチに、死刑執行につき出てくるように、と説得にかかる。「そんな慈悲もないなんて」とパンチ。「慈悲なく多くの人間を殺したのは一体どいつだ」とケッチ。「でも、だからといって、あなた様まで慈悲もなく、手前どもの命を奪うこともないでしょう」とパンチは屁理屈で云い返す。ついにパンチは牢獄から引きずり出される。いよいよ首吊り縄に頭を入れるよつにと命じられる。「こつかな？」と首吊り縄のこちら側に頭をつける。「いやいや、こつだ」とケッチ。「では、こつかな」とあちら側に頭をつけて尋ねるパンチ。とうとう腹を立てた首吊り役人がパンチにお手本を示すべく自分の頭を首吊り縄に入れると、すかさずパンチは縄を思いきり引く。首を吊られたのは、ジャック・ケッチというわけだ。パンチはケッチの死体を棺桶に納めて自分は下がっている。すると男が二人現われ、棺桶を担いで運び出す。パンチは歌う。

いっちまった！いっちまった！ひっかけちまった！

ジャック・ケッチは死んじまった——俺さまは自由の身。

もう怖くないさ、悪魔がたとえ

俺さまのところに現われても。

まさしくこの時、なんと悪魔が舞台を覗きこみ(3 図)、パンチは急に落ち着きをなくす。

おはようございます。——どうもお待たせしましたようで。ロンドンにいらっしやる時には、たくさんご用をおかかえで。(悪魔が近づいてくる。)おやおや手前どもに何か？(悪魔はパンチに向かって突進するが、それをかわしたパンチが一撃お見舞いしようとする。悪魔もまた舞台上に寝ころび、頭を前に後ろに素早く動かし身を守るので、パンチは悪魔のかわりに舞台床をくりかえし打ちつけるのみ。)

ついに悪魔は棍棒を持ち出し「凄まじい果たし合い」が起こるが、結局またまたパンチが勝利をおさめる。パンチは「悪魔の黒装束を棍棒ですくいあげ空中で振り回し、『万歳！万歳！悪魔が死んだ！』と叫んだ。」(145 図)——ここで上演は終わる。

この朝の上演の成果として出版された書物は、クルクシャンクの挿画が魅力となっている。クルクシャンクの挿画は、人形の潜在力を正確にとらえている。木偶がまねる人間の本性、荒唐無稽でありながらそれとわかる人間の模倣こそ、劇人形の真骨頂である。対してコリアーのテキストについては、慎重に扱わねばならないだろう。英国の学界では、コリアーは知的誠実さに欠ける文筆家として悪名高い。コリアーは一七八九年生まれだが、その家庭はワーズワース、コールリッジ、ラム、ハズリットなどの文人と親交を結ぶ知的な雰囲気であった。学校教育は受けず、本人の弁によれば、一六才になる前に「ものを書き始めていた」。一八〇九年から一八二一年までタイムズ紙に記事を書いたが、一八一九年には誤報道の嫌で下院に召喚されている。おそらくこの一件は、暗雲たちこめる将来の前兆であった。「パンチ&ジューディ」と束の間の接点をもった一八二七年当時、コリアーは「ドズリーの古演劇」十二巻を編集しおえたばかりであった。また一八三一年には『英国劇詩史と上演年鑑』三巻を上梓した。後にこれらには文学上の誤謬が多々指摘されることになった。文名が上がるにつれ、捏造も増えていった。とうとう一八五二年には、シェークスピアのセカンド・フォリオ版（一六三二年）につけられていたというふれこみの注釈をつけて出版した。出版直後から正統性は疑問視された。一八五六年に、ある人物をコリアーが名誉棄損で訴えたが、未決に終わった。しかし、注釈はごく最近につけられたものであり、鉛筆書きを消してからインクでなぞった箇所もあるとの鑑定が、一八五九年に大英博物館手稿部門によって下された。以来、コリアーの評判は失墜し、でっちあげが次々と著作に指摘され、見解であれ引用であれ、コリアーのものならば、まずは疑ってかかられることになった。

『パンチ&ジューディ』の悲劇的喜劇もしくは喜劇的悲劇¹⁾ を読む際には、著者について以上のようなことを知っておいても無駄ではあるまい。パンチの声を作り出すスワズルという口中器具をつけていては、この脚本のとおり到手遣い人形を上演することは不可能だと指摘するパンチ上演者は多い。たしかに年老いたイタリアの旅芸人が街頭の上演でしそうにない、色々が見受けられる。コリアー自身は「本文中最も素晴らしいのは……『パンチの戯れ』と題する戯唄である」と主張し、この唄の起源を十八世紀末にまで遡らせてみせている。真相はといえば、どうもこれはコリアー自らの作らしい。コリアーがこのことを打ち明けておりさえすれば、我々も面白いパステイシユ文学を楽しめるところだ。この戯唄は、愛人を持つことでジューディの嫉妬を掻きたてるパンチについて物語る。ジューディはパンチの鼻をひつつかみ、それに怒ったパンチがジューディを殺めてしまう。パンチは自分の子を窓から放り投げ、身内の子もぶちのめし、そしてヨーロッパへと高飛びだ。かの地のご婦人たちを誘惑し、男どもとは大乱闘を引きおこす。パンチの成功は悪魔との契約に基づくもので、英国に帰ると逮捕され死刑を云い渡される。パンチは首吊り役人を欺けたが、悪魔が「命を頂戴しに」やってくる。しかしパンチが悪魔も追いつまうという結末は、ピッチーニの上演と同じである。この本にはたいして印象的ではないソネットがもう一つあって、コリアーはバイロン作だとほめかしているが、これもまた多分コリアーの創作だろう。

出版された。『パンチ&ジューディの悲劇的喜劇もしくは喜劇的悲劇』の信憑性については、議論百出となった。信じがたいほど素晴らしく、また、まともすぎているといえる。中盤少し中だるみにしても、全体として、戸外での旅芸人の上演にいだく期待を上回る演劇を呈している。「ある種の下品な所作」⁶⁾を削除し、実在したかどうかを確認できない「さる紳士の……手になる原稿から」⁷⁾唄を挿入したということはコリアーも認めている。取材の日に何が起こったかについても、証言の相違が見られる。クルクシャンクによると、スケッチをするために何度か上演を途中で止めたということだ。コリアーに云わせると、前もって「クルクシャンクのエッセンスは用意されていた」⁸⁾。コリアーは上演の最中にペンを走らせ台詞を書きとめていた」とクルクシャンクは語っているが、本文は一八〇四年頃にブライトンで「パンチ&ジューディ」を観た時のノートから「構成」し、ピッチーニの上演に基づき修正した、とコリアーは語っている。コリアーの陳述は、ますますもって疑わしい。というのは贋作行為が露呈してからずいぶん経って私家版として出版された（一八七二年）コリアーの日記から引いたものだが、日記の執筆はコリアーによると一八三三年から翌年にかけてのことである。あまりにも自己弁護や自己満足が目立ち、いくら好意的に見ても、書いたものに加筆したという域を超えている。それにもかかわらず腹立たしいことに、コリアーによくあることだが、取材当日の日記につけた後日のコリアーの短い描写が、その朝の様子を彷彿とさせている。

あんなに愉快な朝はなかった。というのはピッチーニ自身が一風変わった人物だったからだ。住まいは汚く、暗く、うらさびれていた。加えてピッチーニ夫人の人を寄せつけない雰囲気。私は決して忘れないだろう。夫人はアイルランド人で主人はイタリア人であるので、二人の会話に行きかう言葉のちゃんぼんが、たまらなくおかしかった。⁸⁾

その朝起こったことについて、仮にクルクシャンクの記憶のほうのコリアーのものより真相に近いとしても、このこと自体は出版されたテキストの価値を損なうわけではない。台詞が何箇所か不正に変更されていたとしてもなお、これは上演のかなり正確な記録であろう。その証拠を二点あげておきたい。まず第一に、ところどころのある種の冗漫さは、調子に乗る語り芸人を横から止めた結果かもしれない。この点については本書第十一章で子細に検討するが、ピッチーニを何度か中断させることで、コリアーとクルクシャンクがいたって不自然な上演に接したのだ、とここでは述べておこう。その結果、ピッチーニの通常の上演よりは何がしか優れているかもしれないが、このテキストを味わうためには、たしかに特別な努力を強いられるようだ。コリアーが観たのは街頭上演ではなく、たいへん特殊な、極めてユニークな状況のもとでの上演であったのだ。第二に、所作はすべて典型的な手遣い人形の所作であって、手遣い人形師ではないコリアーには、なかなか再現しにくいものであったと云えよう。ドラマが説得力を持つようと、台詞が

所作に合わせている箇所もある。たとえば、スカラムーシユの棍棒をコリアーはヴァイオリンと呼ばせ、これをパンチが扱う際には「こ同輩、調べはいかがいたしましょう。甘いがいいか、酸いがいいか？」と語らせるといふ具合だ。また、乱闘シーンも手遣い人形の所作を厳密に守ったものらしく、ある人がコリアーに先立ち述べたところでは、ピッチーニの上演は「追隨を許さないイタリア風」で、我々の期待どおりのものだ。コリアーの信憑性について疑惑はあることも、このささやかな書物は、その朝ドルリー・レーンのキングズ・アームズという特殊な状況のもとでのピッチーニの上演をかなり正確に描き出していることは否めない。

「すべてはこのイタリア人が上演した様々な場面を忠実に再現し描写している。このイタリア人による『パンチ』上演は、今日観ることのできるこの種のものなかでは、際だって素晴らしいものだ」とクルクシャンクも証言している。事実ピッチーニは、当時もっともよく知られたパンチ上演者であったようで、クルクシャンクも「少年時代からピッチーニを知っていた」と云う。実際はピッチーニの上演は当時の典型とは少し違っていたかもしれない。ある人物が、二〇年前を思い出しながら、一八二二年に以下のように述べていた。

ピッチーニはイタリアに生まれた。ずんぐりむっくりで赤ら顔に茶目つ気があった。片目を失っていたが、もう一方の目は抜けて目なく、両目の働きを立派に果たし、欠けた片方を補っていた。いつも防水加工をした帽子をかぶり、ざっくりした大きなコートを着ていた。背中には厚板製の箱をしょっていた。中には自分の小劇場の出演者が収まっていた。そして手には喇叭を持っていた。……劇場自体は背の高い男が担いでいた。その男は影のうすい相棒というが、相方の仕事のための単なる運び屋のように見受けられた。⁽¹⁾

「単なる運び屋」とは実のところ「影のうすい相棒」に他ならない。観客から金を集める「ポトリング」が主な任務である（4図）。人形は明らかにピッチーニがイタリアから運びこんだもので、英国のどんな彫師にも真似ができない逸品だった、とはピッチーニの弁である。コリアーによると、そのパンチ人形はやぶにらみだったということだが、クルクシャンクはこれをつましく描き出している（1図）。人形は十八世紀末風の衣装をつけていた。ジューディはモブ・キャップをかぶり、医者は鬘をつけ、官吏は軍人用の三角帽をかぶり、ポリーはそれらしく摂政時代風のガウンをはおっていた。ピッチーニが一式携えて英国にやってきたのは、一七八〇年より少し前ぐらいのことだったようで、人形も舞台もその当時の雰囲気濃厚にとどめている。

ピッチーニが一八三〇年頃に道具一式を売却した相手が、一八四〇年代にヘンリー・メイヒューからインタビューを受けている。彼が「ポリーニ」と呼ぶピッチーニこそ「パンチ&ジューディ」の街頭上演の草分けということだ（2図）。「ポリーニ」のことは俺

たちの本当のご先祖さまと思ってるよ。おもしろい利口な老人だったな。……ロンドンでは誰もが知っていた。お偉方も身分の高い方も、坊ちゃん連中も旦那衆もごろつきも。誰もが立ち止まってポーシーニの上演を観て、笑いこぼげたものさ。⁽¹²⁾「あいにくピッチーニは、いわゆる偏屈だったようだ。「上演に呼ばれても、自分の都合のいい時間にやってくる。約束の時間じゃない。」「いつもポケットにラム酒の瓶を忍ばせて……幕の陰でこっそりやる。」そのうえ「嗅ぎ煙草も大好物」だった。というわけで、まぎれもなく

あの人は宵越しの金は持たない。……わしがこの道具一式買い取った時にはもう、自分では上演できなくなっていて、ひどい貧乏をしていた。ドルリー・レーンのコール・ヤードにいたが、食うにこと欠く始末だった。稼いだ金は全部飲みまわったんだな。よく人に奢ってたしな——そつ、誰かれの見さかないなしにだ。世間知らずの身の程知らずってところかな。金が入れば全部使っちゃまうし。なくなりやまた働いて稼ぐってわけだった。……最後にや首が回らなくなってセント・ジャイルズの救貧院で死んだ。ああ気の毒だ。あんなところで死ぬたあな。あんなに永い間、人を楽しませてきたっていうのにさ。死んだのは本当に年くってからで、もう目も見えんかった。

事実ピッチーニは九〇才の長寿をまっとうし、一八三五年八月四日に「ジョン・ポツシーニ」として葬られた。⁽¹³⁾しかしブラウイットが一八二八年に出版した本によって、ピッチーニはいわば不滅の生命を得た。この本は数えきれないほど版を重ね、脚色され、版を改め、歪曲され、ふくらまされた。現在もまだ、新版がぞくぞくと出てくる。原版の編者についてのどのような見解を持つとも、「パンチ&ジューディ」⁽¹⁴⁾について研究をするならば、この上演記録こそが出発点である。

第二章 祖先

パンチという名は、フランスのマリオネットのポリシネルやイタリアのプルチネツラに相当する英国のパンチネツ口の短縮形だ、というのが通説である。イタリアのプルチネツラはコメディア・デラルテ劇、手遣い人形、糸操り人形の一つの役柄であり、ポリシネルやパンチの先駆者である。プルチネツラ、ポリシネル、パンチネツ口の三者が、昔も今も役柄として互いにどの程度似ているか、また似ていないかは議論的である。⁽¹⁵⁾プルチネツラはだぶだぶの白い貫頭衣を着て円錐形の帽子をかぶり、黒い半面をつけているのが普通だ。(5図)人形の場合はパンチを思わせる高音の裏声^{フルセツト}で喋る。興味深いことに、手遣い人形としてのプルチネツラも、糸操り人形や役者のプルチネツラと同様に、単一・定型の演目に現れるのではなくて、様々なレパートリーに現れる。

この喜劇には策謀も踊りもござれ
口論にいかさま、それに恋のはかりごと。^②

ふつうの史家はまだ注目していないようだが、英国で手遣い人形として出発した時には、パンチもこのぐらい守備範囲が広がったかもしれない。

しかしながら英国では、プルチネッタ以前にすでに、手遣い人形には独自の根強い伝統が確立されていた。^③「パンチ&ジューディ」理解を助けるために、手遣い人形と糸操り人形の違いについて、ここでふれておく。上方から糸で操られる人形は、基本的に優美で魅惑的である。それに対して手遣い人形は腰より上が動くだけで、粗暴でぎこちない。手遣い人形の方が秀でているのは乱闘や闘争の場面で、人形遣いの二本の手が正確無比に見せる立回りは、一見に値する。したがって、手遣い人形は乱暴で粗野な場面向き、糸操り人形は華美で装飾的な舞台を作りだす。

十四世紀の『アレグザンダーのロマンス』^④は、手遣い人形のおそらく最も初期を描いた絵を掲載しているが（6図）、それは後世の「パンチ&ジューディ」にたいそうよく似ている。その後しばらくしてW・ランバードが、宗教改革以前のオックスフォード州ホイットニーの聖職者たちについて、次のような描写をしている。

ニスをかけて小さな人形をつくり、キリストや夜番やマリアなどに仕立てた。その中で不寝番の（キリストの復活を目撃した）夜番がひっきりなしに音をたてた。二本の棒を打つ音に似ており、そこからホイットニーのジャック・スナッカーと通常呼ばれる。^⑤

このスラップスティックがたてる音からジャック・スナッカーも、遠いとはいえパンチの先祖とみなせるかもしれない。

チューダー朝やスチュアート朝の文学には、人形劇への言及がしばしば見受けられることから、人形劇が人気のある演芸であったことが分る。たとえばハムレットはオフィーリアに「いちやつく場面を人形劇で観ることができれば、お前と恋人との関係を解説してやるのに」と、人形の所作はもとより台詞までも、箱舞台の外で観客のために「解説」する人物を引き合いに出している。これは、ジョンソンの『パースロミュー・フェア』でランタン・レザーヘッドがしていることだ。フィルチャーとシャークウエルとともに、芝居小屋を設営しながら、ランタン・レザーヘッドは手持ちの十八番^⑥について長口舌をふるう。

ようし、まじで新作の看板をおったてようぜ。客寄せの太鼓も頼んだぜ。下手な芝居を出してみな、お客はさっそくスミスフィードルどじゅうの汚穢や泥饅頭を看板に投げつけるぜ。……ポッド親方が亡くなり、不肖わたくしランターン・レザーヘッドの代になってから、ずいぶんいいものを出してきた。『エルサレム』なんてのは堂々たるものだった。『ニネヴェ』も『ノリッジ市』も『ソドムとゴモラ』も。懺悔火曜日には若い徒弟連中が大暴れ、女郎屋をぶち毀すなんてのもあった。けど、『火薬爆破陰謀事件』、あれが大当たりだ。一八ペンス、二〇ペンスの木戸銭で、午後に九回も打ったんだからな。なんてったって自分の国のお話がいちばん。めんどろがない。なじんでいる。今のは学問をひけらかしすぎだ。せつかくの芝居が台なしだ。

ランターン・レザーヘッドの声は、「パンチ&ジューディ」史のかなたにまで届くだろう。その調子や身振りは、のちのパンチ上演者に通じるところが多い。過干渉のピョリタン、ズイール オブ ザ ランド・ビジーが、パンチのキーキー声に似た人形劇の「かん高いキーキー声」を「悪魔の馬車の車輪」に譬えて非難したのみならず、道徳性そのものに否を唱えてレザーヘッドの上演を中断させたことも、また、「パンチ&ジューディ」の歴史とびつたり重なっている。

キャロライン時代にダウナント「訳註 一六〇六 一六六八年、一六三八年から桂冠詩人」が旅の人形芝居を描写している。

さてさて町からてくてく歩ききたりて、
可哀想に単純なお道化をだます。

この人形芝居が系操り人形ではなく手遣い人形であったことも、次に引用した箇所から分る。ここでは箱舞台は「チムニー」と呼ばれている。

チムニーの男は衣装に着替えるために隠れ、
人形は我らがいにしえのベス女王さま役をし、
そして男は芝居のあいだ
鼻から人形の声を出す。

最終行は、パンチのキーキー声に、またもやふれている。このような人形遣いの旅の生活は必ずしも楽なものではなかった。一六三

〇年には、ドーセットのベミンスターで、ピューリタンの説教師が壇上から人形遣い一家を痛罵した。一家は説教師を自宅までつけて行って恐喝したということだ。一般の人々は芸人たちを大事にしたようだが、地方行政当局は、撤去命令を出すにいたった。

このような迫害にもかかわらず、人形遣いたちは「モーシヨンス」と呼ぶ人形劇で大いに人々を楽しませてきた。一六四一年のパーソロミュー・フェアでの記録によると、「こちらは道化の衣装をつけた悪漢が、喇叭を吹きながら太鼓も打って、人形をご覧と誘いかけ、はたまたあちらは野育ちの木こり、またまた夢魔のごときおどけ者が『モーシヨンス』人形劇を観るようにと熱心に呼びこんでいる。」共和政時代には、劇場は公的には閉鎖されていたが、人形遣いたちは上演を続けていた。一六五五年のパーソロミュー・フェアでは「ペニーにて素晴らしい人形劇をご覧になれます」とのことだった。また一六五九年には、父クロムウエルを英雄として記憶に残そうと願ったヘンリー・クロムウエルが、次のような印象的な言葉で議会演説を行った。

人は父の赤鼻を云うが……その名は今も不滅です。三〇年もたてばパーソロミュー・フェアで「かの勇敢なクロムウエルの生きざま死にざまを見てらっしゃい。お立合い、お立合い」と叫ぶ声が聞こえるようです。わたしには臉にうかがぶようです。肩にベルヴェットのケープをまとい、頭には紙成型の帽子をかぶり、議事堂へと疾走していく父の姿が。そして、口に月桂樹の葉をくわえた男が、クロムウエルに代わって叫ぶのです。「必ずやきつと、議會を解散するのだ」と。それを聞いて守衛たちは叫ぶのです。「ああ勇敢なる英国人よ」と。その時、子守女は悲鳴を上げ、子どもたちは泣き叫ぶ。騒ぎに乗じて悪魔がクロムウエルを連れ去ってしまうのです。¹⁰⁾

ちようどパンチの鼻がそうであるように、クロムウエルの鼻も人形劇の主人公にふさわしいものであったようだ。クロムウエルの襟やベルヴェットのケープ、帽子もまたパンチを思わせる。声は「月桂樹の葉」を用いて出されるが、これもスワズルのような口内器具の一種だろう。そしてクロムウエルが最後に戦う相手は悪魔である。というように、一連の描写は奇妙なほど、パンチの英国登場を先取りしている。

三年後、サミュエル・ピープスが「イタリアの人形劇を観たが、今まで観たなかで最上のもので、たいへん良かった」と日記に記している。¹¹⁾コヴェント・ガーデン広場で「ポロニーヤ氏、またの名をポリチネツラ」によって上演されたもので、前年ポロニーヤを出て、本名はピエトロ・ギモンデという者で、王の面前で上演したこともあった。その後を追って、続々とイタリアの人形遣いが英国に渡り、糸操り人形の「ポリチネツラ」、もしくはすぐにパンチネツロと呼ばれるようになったのだが、その人気は間もなく確立した。彼は何度かピープスを「すこぶる」喜ばせた。また、一六六七年には新装のヴォクスホール・ガーデンズの集会所の外に、木

像が建てられた。六年後トマス・アイシャムは、ノーサンプトン州のブリクスワース・フェアで、人形劇のパンチネットを観たとの記録を残している。ドライデン、シャドウェル、ウィチャリー、オトウェイなどが、みんなパンチネットについて一言残している。¹²⁾ また当時のバラッドにも登場している。恋人は

キスをするにもパンチャネットのようにか
はたまた乳吸う豚のようか。¹³⁾

ロチエスター子爵ジョン・ウィルモットが描き出すのは、実に厄介なパンチネット像だ。

赤鼻ガ二股、目はぎよろり、
とんまの百姓みたいな歪んだ顔から
臭い息、嫌われるものはみんなある、
なのにパンチネットは色男をきどる。¹⁴⁾

一六八二年のことだが、トマス・ブラウンの孫が持っていた人形劇玩具一式には、パンチとパンチ夫人もあった。八〇年代とはウィリアム・フリップスがバーソロミュー・フェアで、人形のパンチと卑猥な掛け合い問答を繰り返す悪名高い上演を行った時代であった。一六九八年にはアディソンが、パンチを数行にわたって描写するラテン語の疑似英雄詩まで書いている。というふうにパンチは、いともたやすく英国固有の伝統にとけこんだ。

王政復古期からしばらくは、人形芝居は非常に凝ったものだったと推測できる。

作者パンチは奇妙な見なれぬ道具を用意した
バーソロミュー・フェアで新作オペラをするために¹⁵⁾

しかし、パンチは中心人物というわけではなかった。人形遣いがこごとと見せ場をくり広げるなかで、「下卑たわいせつな台詞のかけあい」にしろ、卑猥で下品な身振りにしろ、コミック・リリーフを提供することがパンチの役割であった。このことは、「バーソ

ロミュー・フェア期間中スミスフィールドの居酒屋『王冠』前のクロリーの芝居小屋』の宣伝（一七〇三年）を見れば分る。演目は『創世記昔話』であった。

上から二重、三重に道具が降りてきて、また金持ち連中が奈落からせり上がってきて、ラザロはアブラハムの腕に抱かれている。「訳註 ルカ16：19 31」傍らでは何人かが、ジグやサラバンドやカントリー・ダンスを踊り、観客をすっかり魅了している。そこにパンチ氏とジョン・スベンドオール卿の楽しい趣向が入る。⁽¹⁶⁾

ステイルは、流行先端の地バースの一七〇九年社交シーズンに、糸操り人形のパンチを観たと記している。その時の人形遣いは、コヴェント・ガーデンでもパンチ芝居を始めたマーティン・ポウエルであった。ポウエルのパンチは太鼓腹と襟飾りに高い帽子が特徴的に描かれている。（7図）相方の女役はおそらくパンチ夫人だろう。舞台の前に立っているのはポウエル自身だ。せむしの小人で、自作の芝居の主人公に似ているのは奇縁である。

その頃までに、パンチはすっかり英国に帰化しており、粗野で不作法な皮肉屋として、婦人たちの集まるところに首ならぬ背中の瘤をつっこむので攻撃的となっていた。

不肖わたくし

パンチネツロと呼ばれ、

その美貌が自慢。

お茶目で可愛く、

皆さまのお楽しみに

わたしがいなくちゃ楽しくない。

わたしの帽子はとんがりで

首には襟飾り、

一脱ぎして素肌を見せたいところだが、

ご婦人方が眉をしかめるのはかなわない。

この盛り上がった背中と、たるんだ胸は、

お見せすれば、必ずや笑いぐさ、
まったく、わたしこそ極めつけの一人、
というわけで、誰もわたしを疑わない。

スウィフトはパンチの道化ぶりと観客に与える効果を以下のように記している。

さてさて、悲嘆にくれるは観客

パンチは舞台から引っこんだまま

だけどパンチのしゃがれ声を聞きつけて

待ちきれない観客は大はしゃぎ！

もう芝居のことなどかまわない、

どちらが実母で、偽はどちらか、

申し立てをソロモンがどう裁こうと、

またエンドルの口寄せ女にも、耳を貸さない。

たとえファウスタスが、悪魔を随え

舞台に現れても、気に留めはしない。

もしパンチが客の気を引くために、

舞台袖から化け物のようなあの鼻を覗かせて、

そしてまたすつと引っこめれば、

ああ喜びが悲嘆となることか。

一瞬も一生の長さに思える。

パンチが舞台に現れるまでは

目にする最初の悪戯はパンチ

シバの女王の膝上にさつと乗る。

ロレーヌ公爵は短剣を抜く。

パンチは喚きながら駆け回り、駆け回りながら喚き続ける。
悪態はつき放題。

スペイン王には云いがかりをつける。

セント・ジョージにも悪戯しかけ、

龍にまたがって行ってしまう。

さんざんぶたれて蹴られても、

悪ふざけはやめはしない。

何事にも鼻を突っこむ。

そのわけは人間どもには分らない。

心痛む悲しい場面に

皆さまとともにパンチもやってきて、一発屁をひる。

木でできた人形のうちで、できるなら、

パンチの首を吊りたくないものはない。

皆をからかい、皆にからかわれながら、

観客がどれほど喜んでいいることが。

芝居進行には無頓着、

ただ聞き耳を立てて目を凝らすだけ。

これっぽっちも気になさぬように、おおサーブラ「訳註 土着イスラエル人」

聖人と蛇ではどちらが実入りがいいか、などと

もしパンチが（また茶化す）

したたかにやりこめられて、また皆のものを困らせるならば¹⁸。

パンチの「しゃがれ声」「化け物のような鼻」、そしてパンチの首を吊ってやりたいと願う他の人形たちが、ここではとりわけ注目に値する。

スウィフトがここで描写しているのは、多分、ダブリンの人形師ストリッチの上演であろう。一七三〇年に、ストリッチの上演は

アイルランド祝宴担当によって法外な税をかけられたが、ありとあらゆる社会階層の人々からの支持を得て、抗議の行列がダブリンの街路を練り歩き、ついに課税は撤回された。ストリッチの上演がいかに人気だったかが、舞台俳優たちの愚痴からうかがえる。一七三二年にスターリング夫人とやらが詩にしている。

我らが劇場から急いで出でよ、ここは廢れた、

心得違いにも説教して楽しませる肚だ！

氣のきく輩は道理からもシエークスピアからも逃げ、

スカラムーシュとパンチネツ口のもとへと急ぐ！

木製の兄弟のもとへ、ああ神さま！

付け前髪の洒落者たちよ、おつむの出来は君らと同じさ。⁽¹⁹⁾

すでに糸操り人形のパンチネツ口は妻を娶っていたが、パンチ夫人はこの世紀を通じてジョーンと呼ばれていた。一七二〇年代には、奇術師フォークスが「パンチとその妻ジョーンによる滑稽喜劇⁽²⁰⁾」を上演していた。フィールディングはトム・ジョーンズに「パンチとその妻ジョーンをなおざりにして人形芝居を駄目にしてしまった⁽²¹⁾」と、人形遣い相手に不平を云わせていた（一七四九年）。その二〇年前には、フィールディング自身『作家の笑劇』において、ジョーンの造型に一役かっていた。次に紹介するのは、この小品中のデュエットである。

パンチ… ジョーン、ジョーン、ジョーンは口やかましくて、そして

ジョーン、ジョーン、ジョーンは怖ろしい

運がいいなあ、

結婚解消できる男は、

叱るばかりの女房なんぞいるもんか。

ジョーン… パンチ、パンチ、パンチ、背中のお瘤を考えてもごらん。

突き出た太鼓腹を見てごらん。

へへん、あたしと

やりあう気なら

その太鼓腹をぶんなぐってやる。(二人は踊る。)

パンチ… ジョーン、お前は俺さまの人生の邪魔

こんな女房なら首くくり縄のほうがましさ。

ジョーン…パンチ、首がもう半ヤードも長かったら

お前さんにもいいところがあったらうに。

パンチ… このぶさいく女。

ジョーン… ろくでなし。

二人で… お前なんか首吊りにあえ。のたれ死にしちまえ。(また踊る。)

ここでもまた、首吊りが話題となっている。

十八世紀前半の特質は、パンチが多彩な姿を現したことであろう。フィールディングは『コヴェント・ガーデンの悲劇』(一七三二年)において、パントマイムの下品で滑稽な女形パンチ、マザー・パンチボールを登場させた。その六年後に一匹の犬が攻撃したのは、スペイン人に扮したパンチであった。

スペイン風に装い気取ったパンチが、

小さな舞台をぎくしゃく大股でのし歩けば、

このまがいの英雄にポーター犬が武者ぶりつく、

まるで本能的に英国の敵を知っているかのよう⁽²³⁾に。

一七四八年にフィールディングは、「信用できるポン引きパンチ卿、軍楽隊鼓手長ジョーン・パンチ令夫人、女官パンチ嬢、そして批評家マスター・ジャッキー・パンチ⁽²⁴⁾」を描きだした。ホーガスはパンチが荷車を押しているところを一度ならず描いている。それは、ティディー・ドール(有名な露天の砂糖菓子売りで、ホーガス「タイバーン処刑場に行く怠け者の丁稚」に登場している)が買ってくれそうな客に向かってふるう長口舌に出てくる。「さあさあ、おいしい生姜入りクッキーだよ。スパイスの効いた生姜入りクッキーだよ。焼きたての煉瓦のように口で融けて、腹の中でパンチと荷車のようにがらがら転がるよ。」⁽²⁵⁾「ギルレイの漫画」国家

的べてん師」(一七八八年)では、パンチは何とジョージ王、夫人はシャーロット妃として登場するが、ピット、ヘイスティングズ、サーロウなど忌まわしい偽善者大臣たちが、勲章や金貨や何やら分らぬ大法螺で人民をたぶらかそうとする。

十八世紀のパンチについては、さらに二つの特徴をあげておく。第一には、駄洒落との関係であり、それは以来ずっと続いている。「下らない駄洒落に陳腐な謎かけ」におぼれすぎる、というポウエル上演系操り人形に対する批判は、手遣い人形のパンチが「下品な冗談につまらない駄洒落」を披露しすぎという一八二〇年代の寸感に不思議と通じるものがある。しかしながら、その後出版されたバーナード・ブラックマントルの『駄洒落屋の手引き』は、この種のユーモアに対する通常の英国人の態度をより敏感に反映しているように思える。シエークスピアから酒場の駄洒落屋まで、駄洒落は一般人には大いに受け、識者には眉をひそめられてきた。しらせる場合も当然あっただろうし、パンチも時にはおもしろくない駄洒落を飛ばすこともあっただろう。しかし駄洒落の根本的な魅力は、言語がダイナミックに使われうることを示す点にある。理性の枠を破り、自立した意味を復権するために、駄洒落は重要な手段であった。仮に「正しい」用法が抑圧の手段であるならば、駄洒落は解放に向けての企てである。したがって、パンチがその紆余曲折の歴史のなかですっと駄洒落を飛ばし続けようとしてきたことには、何の不思議もない。

注目に値する十八世紀パンチの二番目の特徴は、パンチの悪魔との格闘である。多くの民話とバラッドが悪魔との格闘を扱っている。たとえば次に引く「リトル・マイク」の結びのように、

次の日悪魔は死んだ、

何て素晴らしい報せだろう。

奴に何が起こったか見てごらん。

悪魔はバートロミー・フェア(144)に葬られたのだ。(26)

おまけに悪魔との格闘は、伝統的な人形芝居にはつきものの場面であった。クロムウエルが思い描いた父親についての人形芝居も、悪魔との格闘で幕引きとなった。一六九九年の五月祭でウオードは、「パンチネツロと悪魔の間の意味不明なやりとりが……プリキのように軋る声で野次馬の聴衆連中の耳に届くのを」聞いた。また『トム・ジョーンズ』では宿の女主人が「昔は人形芝居には『工フタの軽率な誓い』やなんかのように聖書から教訓的な話が採られて、悪人は悪魔に連れていかれた」ことを懐かしんでいる。

このような背景が、パンチの格闘と呼応する。軍配は不明である。ある文筆家は「人形劇の掟では最後には悪魔がパンチを「連れ去る」と、一七四一年に述べている。しかし、ジョンソン博士は「田舎風の人形芝居では悪魔がパンチにどんなにこっぴどくぶん

殴られたか」を回想している（一七六五年）。さらに博士が云うには、「今どきの人形芝居では……時にパンチは悪魔と戦うが、いつも勝ちをおさめている」。同じくエドワード・ポバムも、悪魔をぶちのめすのに、どのようにパンチの妻が夫に加担するかを描いている。悪魔は、「この二人の支配から逃げ出し、力なく叫びながら空に消える」のだ。また、チャールズ・ディブディンの『滑稽鏡』（一七七五年）でも、パンチが勝利をおさめたようだ。

あの陽気な輩、

パンチネツロ、

何とここで踊りますので、

その浮かれぶりは地獄でも

鎮めることができぬよう、

ずっとはしゃぎつづけていますので。

……

陽気なやつなら誰でもが

パンチネツロにむかつて

（お碗片手に）大笑い、

わめいて、どんちゃん騒ぎといこう

そして悪魔と戦おう

地獄じゅうの大騒ぎさ。⁽³⁴⁾

どのような上演で、勝者がどちらであっても、パンチと悪魔の格闘場面は十八世紀後半の人形芝居ではクライマックスであったのだ。しかしながらその頃までに、階級によって文化は分裂しつつあった。フィールディングがマダム・ド・ラ・ナッシュの名で次のような広告を出したのは、一七四八年のことであった。

昼の十二時と夜七時に、マダム・ド・ラ・ナッシュはハイマーケットのパントン街の大きな朝食堂で、高貴な方々また良家の方々のために、最高級の紅茶や珈琲、チョコレートやジェリーを提供します。また同時に、皆さまのために無料にて、素晴らしい英

国古来の演芸をお見せします。それは

人形芝居

で嘆かわしい悲劇が演じられます

ベイトマン、愛に死んだ男

パンチとその妻ジョーンの滑稽劇もあります。駄洒落は新ネタ、お〇らはブービー、唄に、踊りに、格闘に蹴りあい、他にも色々ございます。ボックス席は三シリング、平土間は二シリング、天井桟敷一シリング。お茶は十一時から。パンチ氏は十二時丁度にお目みえ。夕方のお茶は六時から。パンチ氏は七時丁度にもう一度お目みえでございます。³⁵⁾

十八世紀後半の上流階級は次第に人形芝居をエクスター・チェンジ「訳註 一七七三 一八二九年、ストランド街にあった大規模な動物見世物小屋」の大広間のような高級感のある場所で楽しむようになってきた。ディブディンの『滑稽鏡』もここで上演された。ここには野次馬も侵入しないし、流行の影絵劇(11図)やマリオネット(いくぶんか洗練され、ファントッチーニと名前も替わった)には、パンチが登場しないこともしばしばあった。一七七三年にサミュエル・フット(12図)は宣言している。

さて皆さま、本日光栄にも上演の、この種のお芝居は、本来の型から逸脱し、また後の興行師がわけのわからぬことを云ったので、すっかり人気は地に墮ちてしまいました。……。子ども部屋を去りし以来、ほとんどの方がご覧になってはいない見世物です。そして、その地位はひどく貶められたので、ちょうどテスピスの喜劇のように、収穫の祝宴をもよおす家や、通夜や田舎の縁日へ荷車に乗せて運ばれました。たとえ町にやってきても、うらさびれた屋根裏や町はずれの崩れそうな厩のようなみすばらしい所にしか現れなかったのです。³⁶⁾

これは、かつての英国にはなかった階級差に基づく非難である。しかし縁日や街頭の人形師は、上流階級の支持を失っても予期せざる財源を獲得することになった(13図)。貧しく搾取される聴衆のために、人形師は上演を変えた。自分たちの上演を下層階級の生活体験に結びつけ、他ならぬ「パンチ&ジューディ」を創り上げたのである。

第三章 上演の成り立ち

妻殺し、絞首刑と悪魔がつきものの「パンチ&ジューディ」の型ができたのは、一七六〇年から一八二〇年の社会的大変動期のことである。要は旧経済の破綻するなかで、慣習と共同体意識に支えられていた旧文化が、ゆさぶりをかけられ崩壊したのである。思いがけないことだが、労働者階級の文化と呼びうるものが、ぎこちないながらそこに生まれでてきた。「パンチ&ジューディ」は、その一つの例である。

一六八八年の名誉革命は、「土地を所有する者、財を有する者による寡頭政治」⁽¹⁾を確立し、それはその後およそ一世紀続くことになった。秘密の儀式におけるがごとく、緋の衣をまとい見るからに情け容赦のない表情で、長髪の鬘を被った法の執行者が巡回裁判で地方をまわり、秩序は保たれた。その見せしめの最たるものは公開処刑であり、民衆に複雑な反応を呼びました。一つの例を記す。聖セパルカー「訳註 監獄のあつたニューゲートの外の教会」で鐘が鳴り響くなか、莊重な行列が進む。「すべての善良なる人々よ、今、死に赴かんとするこの罪人のために、心からのお祈りを神に捧げ給え」と教区吏が唱え、首吊り役人は死刑台で待っている。荷車が到着し、首吊り役人が罪人に縄を掛ける。そしてそれから罪人がハンカチを落とすと、荷車がはずされて死体がぶら下がる。

また、「タイバーン・フェア」もあつた(14図)。おびただしい群衆が、やはり唄を口ずさみ、木の実や生姜入りクッキー、オレンジを食べた。この縁日は独自の起爆力を持ち、サブ・カルチャーを生み出した。グロウス『俗語辞典』によると、「絞首刑」には百語以上の隠語があり、これより隠語が多いのは「銭」だけだという。処刑は「吊るし試合」であり、これを目当てに人々が何千となく群れをなして集まつた。絞首刑は「パディントン・ダンスを踊ること」だとか「シエリフの額縁の中でぶらさがること」だとか云われた。謎々も盛んだつた。どنگりの子馬を生んだ馬に乗っているのはだーれ？絞首刑者。その心は、樫の木がその馬。しかめっ面に小便宜びつたズボンの男はだーれ？仲間にも舌を出しているのはだーれ？口笛は吹けないのに小便宜するのはだーれ？

権力と法の尊厳の究極的な誇示として支配者層が絞首刑を用いる。それに対する民衆の反発が、このような隠語や謎々には現れている。絞首刑が存在することが常に脅かしてあつたのだ。しかし十七世紀も進むにつれて支配者層にとっては、タイバーンやその他の縁日で噴出する下層階級の活力が脅威となつた。そして下級労働者をもつと効率よく管理するべきだという信念を強めることになつた。そのためには法だけでは充分ではなかつた。だが当時浸透しつつあつた支配的でヒューリタンの宗教が、これを補つことになつた。勤労の倫理をたゆまず促進し、カーニヴァル的な乱痴気騒ぎに対抗したのだ。もともと労働は「純然たる徳行」⁽²⁾であるのみならず、「誘惑の熾烈さ激しさ」⁽⁴⁾を鎮めるべく身につけつる規則的で規律正しく信頼に足るほほ唯一の手段であつた。祝祭にはつきもの

の性的交渉は、婚姻においてのみ考慮される対象となり、それも抑制のためであって、解放のためではなかった。

「栄えよ、増えよ」という戒命ののっとり、神が自らの栄光を増すために望まれた手段である。適切な菜食と冷水浴とともに、ありとあらゆる性的な誘惑に対しては同じ処方箋が与えられた……。『天職に励み全うせよ』⁽⁵⁾」

云い方を換えると、婚姻制度は社会統制の手段であった。サミュエル・ロジャーズは理想を詩にしたが、自らが用いた象徴体系には無頓着でしかなかった。

……ルーシーには持ち場で唄わせよう

赤い洋服に青のエプロンをつけて。

木の間に見える村の教会は、

我らの結婚の誓いが初めて成されたところ、

陽気な鐘の音をそよ風いっばいに鳴り響かせよう

尖塔は天国を指すだろう。⁽⁶⁾

アイザック・ワッツもまた無造作に、逆の状況を描きだしている。

……あんぐりと口をあけた穴に悪魔がそいつら「罪人たち」を突き落とし、

背筋が寒くなるぞつとすることだが、まさかさまに落ちてきたそいつらを地底の真ん中で受けとめるのだ。⁽⁷⁾

当時の芝居がかった説教師たち（15図）には、悪魔は現実であったのだ。悪魔は世俗・肉・悪魔という反キリストの三位一体の第三の地位にある。男も女も、法や神聖なる結婚や地獄の脅威に援護されて、悪魔に抗ったのだ。

反キリストの三位一体が危険なまでに蔓延している場所は「競馬場、通夜、舞踏、縁日……芝居小屋」であった。こういうところでは、罪人たちが「街娼とおぼしき女」を連れて、「卑猥な唄を口ずさみ、冗談をとばし、下品で馬鹿げたことを云っている」⁽⁸⁾のを目にするかもしれない。云うまでもなく、このような場所で民衆文化が新しく労働者階級向けにつくりなおされ、活力を入れられた。

たとえば、「芝居小屋」は富裕層が出向かなくなったので衰退するかと思われたが、実際は十九世紀初頭に急増し、メロドラマのようない新しいジャンルの芝居を発達させたり、パントマイムのように古くからあるものを刷新した。中心としてハーレクインにクラウンが取ってかわり、残虐でグロテスクで諷刺にとみ挑発的な様相をおびるようになった。同様に、十八世紀後半には廃れてしまうように見えた縁日も、また新しい生命力を得たようになった。ある行政長官が、バーソロミュー・フェアでは「ここ数年間に不法で好ましくない拡張が起こっている」と一八一五年に訴えたが、実際に指定区域を軽く越えて、縁日は進出していった。次の例は典型的である。

各種縁日が首都から周辺へと拡がっていくことは、この時代の悪弊の一つである。ボウやキャンバウエルやペッカムがその例である。トットヒル・フィールズ・フェアは、およそ一世紀にわたって振るわなかったのに最近また持ち直した。そしてエドモン・トンは今や全盛期を迎え、シヨアディッチにまで及び、筆舌尽くしがたい喧騒と混乱を産みだしている。^⑩

これが下級階級勃興の証であるとは、まったく途轍もないことだ。

バーソロミュー・フェア、シティーのカーニヴァル——徒弟には愉快で親方には不快。女中には慰み、かみさん連中には脅威で、泥棒には好機で警官にはテロだ。^⑪

このようなディオニソスの「カーニヴァル」は、フロククトンのような新しいタイプの見世物師に活躍の場を与えた（17図）。彼は人形遣いとしてよく知られているが、人形は中心を占めながらも演目はヴァラエティー上演に近かった。たとえば、他にも芸人を雇うのみならず自ら手品師に扮し、九百体の人形を備えつけた「天下無類の大音楽時計……世にも珍しいオルガン」を見世物にした。彼は一財産つくったと噂されたが、一七九四年に亡くなった時には五千ポンド残して……いた。フロククトンの娘はスターマーという人形遣いと結婚したが、道具一式は一座の「未亡人フリントとギンジャル」の二人に譲っている。未亡人フリントはバーソロミュー・フェアで一〇年にわたって上演を続けた。ダニエル・ギンジャルのほうは、自分の家族を中心俳優にして、フロククトンのものより感動的な「グランド・メドレー」を創りあげ、一八三六年に死去した。ギンジャル一座は縁日から競馬場、遊園地へと巡回した。笑劇、パントマイム、メロドラマやシェークスピアまでレパートリーにふくむリチャードソンのような旅の巡回劇場や、動物の珍芸、アクロバット、道化芝居や時には人形芝居も演目にあったソーランダースのようなサーカス団（18図）、後の有名なウムウエルのもの

のように、単なる珍獣の見世物ではなく、自前の楽団の奏でる音楽にあわせて動物に芸をさせるメナジェリーと肩を並べていた。これらの見世物の相互関係は明らかである。「縁日」と題された十八世紀末の大判刷物(16図)の二三の木版図には、芸をする動物や曲馬、手品、芝居などと並び、「パンチとその妻」の図もある。同じ時期の「英国じゅうの縁日の紹介」というバラードも「人形芝居におけるパンチとその妻」に言及している。

産業革命以前にパンチは、手遣い人形として知られるようになった。王政復古以来、手遣い人形は大規模な糸操り人形劇場に附属的に設けられることが多く、縁日での軽い余興として続いていた。サザック・フェアで「パンチのオペラ」を宣伝する小屋外での実演をホーガースが一七三三年に描いている(9図)。パンチ・その妻・悪魔などのおなじみのキャラクターを大掛かりな芝居から借りる、このようなささやかな見世物は、小屋内で上演する主演目の「予告編」もしくは「縮小版」の役目を果たした。たしかに初期の「パンチ&ジユディ」上演には、糸操り人形に起源を持つ場面が取り入れられていた。しかし、仮に「パンチ&ジユディ」がこのような古い形態から発展したもので、パントマイムと同様に、まったく新しいものに生まれかわるような発展を遂げたのだ。というのは、当時の明らかに矛盾する二つの願望——共同体主義と個人主義——をおそらく独自の方法で融合する試みに見えるからだ。外からの権威の強制的受け入れを拒んだことで、必然的にパンチは労働者・被支配者層と同列になった。当時の大判刷物によると、

もし時代がちつとも良くならないなら、女主人たち自ら糸を紡ぐだろう
お仲間と同じく、鼻も顎もパンチのように、瘦せ尖るだろう。¹⁵

同時に、パンチの完璧なまでのエゴイズムは、ご先祖さまの間抜けぶりとは一線を画しており、産業資本主義にともない台頭した個人主義という新しい「時代精神」にふさわしい。一八五四年に「パンチ」誌の記者は、一人の浮浪児が歩道で仲間を次々と突きとはす姿に、パンチ芝居の反映を読みとっている。浮浪児の自己中心主義はパンチから学んだに違いなく、突きとばされたほうは、「教区吏や外人や警官などのパンチ芝居の犠牲者たち」のようだと述べている。¹⁶

このようなアンビヴァレンスは時代の反映である。一七七四年には、ジャック・ランが処刑のために運搬車に乗せられていくのを、当時著名な彫刻家ジョゼフ・ノレケンスでさえ幼い少年を連れて見物に出かけた。しかも、治安判事の舅が治安官ではないのを残念がっていた。なぜならコネがあれば、二人は車の脇を「タイバーンまでずっと」練り歩くこともできたからである。このことは注目に値する。なぜならば、ノレケンスはまた「パンチ&ジユディ」の大ファンで、「パンチとその妻の街頭上演にあられもなく大はしゃぎし」¹⁸、シエークスピア劇よりもずっと気にいっていたからだ。

ノレケンズの伝記作者の記述から、今日に通ずるような「パンチ&ジューディ」の上演が始まった時期を、おぼろげながらつかむことができる。「パンチ氏が人気者になる前には」（斜字は著者）メイ・デイに乳搾り女が踊るのが、ノレケンズのお気に入り、「旅回り芝居」であったということだ。¹⁹ パーソロミュー・フェアについての「モーニング・クロニクル」誌の記事（一七八四年）は、もっとはっきりしている。

フロククトン氏は……小屋外でも小屋内でも沢山の余興を提供した。ポケットに押しこんだ以上に多くの金を取りだして見せた……手品師には、長髪の紳士連中も頭を掻いた。旅回りのフランス人形芝居も一画に足場を組み、上演者も増強した。パンチと悪魔も移動小劇場を用いて屋外で上演され、人々を小屋の中へと誘いこんだ。²⁰

フランス人形芝居とはマリオネットのことで、移動小劇場は手遣い人形のパンチ用であった。

上演の起源をめぐる論争を辿ると、最も古い文献は、縁日でのフロククトンの「パンチと悪魔」上演についての記述である。フロククトンが創始者というわけではないが、草創期においては「パンチ&ジューディ」は、新しく急成長を遂げていた労働者文化の他の娯楽と密接に関連していたことが、はっきりする。「パンチと悪魔」をフロククトン自身がその「移動小劇場」で演じたかどうかは定かではない。しかし、パンチを登場させた系操り人形の簡略化は呆れるほどだが、チャップブック「パンチ人形芝居」（一七七二年）に描かれている。²¹（17図）これはフロククトンの小屋外の一連の様子を描きだしている。手品師（フロククトンとおぼしき人物）、戴冠したフランス王と女王の傍らを手押し車に妻を乗せて通りすぎていくパンチ。パンチとその妻はスカラムーシュとハーレクインとともに、船乗りベンがホーン・パイプを演奏するのを見物している。パン屋が悪魔と出くわし、集金袋の奪い合いになる。ついにパンチとジョーンは口論を始め、悪魔はジョーンを助けにやってくるが、ついにジョーンともどもパンチを連れ去ってしまう。この魅力的な一続きの絵は、新しい人形芝居の草創期を写している。

一八〇一年に、ストラットは人形芝居が「過去の栄光をほとんど受けついでいない」と述べていた。²² ストラットが懐かしむ古風な動きのない見世物人形芝居は、もっと活力に満ちて独創的な、フロククトンの人形芝居のようなものに代わられたのである。（ヨーロッパ大陸でも産業革命が社会に及ぼす変化がおぼろげにも感じられるようになった時に、同様だがもっと顕著な変化が起こっていた。フランスではギニョールがポリチネルの人気を奪うようになっていたし、ドイツではカスパーがハンスヴルストにとって代わっていた。）ストラットには嘆かわしいことだが、縁日につきものの裁判所記録によると、一七九〇年のパーソロミュー・フェアには人形芝居八種と「メドレー」三種（フロククトン、バニスター、オールドリッジによるもの）が出ていたことから、その人気がわか

る。その後一〇年にわたって、登録された演芸の高い割合を人形芝居が占めた。とはいっても、手遣いか糸操りかは詳らかではない。一七九二年には一〇の人形師が登録され、一七九〇年、一七九四年、一七九九年には八の人形師が登録された。これだけではごく一部であり、リストも完備されているとは云いがたい。しかし、人形芝居は非常に人気があったということは明白である。

一八一一年にはパンチは「人形の王子さま」⁽²³⁾ となっていた。その年のバーソロミュー・フェアに突進してきた雄牛を描いた版画(18図)には、溢れかえるものの中に「パンチ&ジューディ」が見える。「さてさて、かのロスキウス」訳註 ローマ最高の喜劇俳優「のごとき素い晴らしい木製の名優パンチ氏に、驚きのたった一ペニーでお目見えできる時間ですぞ」⁽²⁴⁾ また数年後にピアス・イーガンが、フロククトンの後継者ギンジャルとその一族の縁日での様子を記している。

……ギンジャルの息子は、緩く張ったワイヤの上で、命がけの素晴らしい演技を見せていた。細長い舞踏場では、カドリールを踊るグループが幾つもでき、名高いファントツチーニあやつり人形芝居が活気を与えていた。こちらの道にはギンジャル氏の芸術劇場が建てられ、軽業、影絵芝居(中国影絵)、曲芸、その他もろもろの芸当をしていて、ギンジャル氏はグラス楽器で曲を幾つか演奏していた。また、あちらの道ではパンチネツロがおどけて観客を楽しませていた。また別のところでは、手品師がたいへん手際よく巧みにトリックや奇術を色々見せたり、イタリアの旅芸人が数人で音楽つき機械仕掛けの箱舞台を見せていた。⁽²⁵⁾

そこには楽隊も熊の芸当もあり、大衆娯楽の百花繚乱であった。そして、その渦中に手遣い人形のパンチネツロがいたのである。初期のパンチ上演者は、ほとんど例外なくこのような環境で上演したのだ。たとえばジョー・オーディーは、縁日の「道化役者」でもあったし、ジョブソンは、メドレー「ジュリアス・シーザー、もしくはパンチがローマの皇帝になると」(一七七八年)やホーン・パイプを踊るリトル・ベンやパンチとジョーンの情景を取り入れた。一七九〇年には、ジョブソンの「古風な人形芝居」のクライマックスは「評判の拳闘家スワッチェル氏(またの名をパンチ)とその妻ジョーニーの火花散る戦い」⁽²⁶⁾ であった。というわけで、最初期の例から「パンチ&ジューディ」が産業革命の結果生まれた新しい大衆文化の産物であることが分る。

このような見世物が非常に多種多様であったことは、当時の絵を見ればよく分る。フロククトンの「パンチと悪魔」への言及があった一年後の一七八五年には、歩道に設置された箱舞台で、パンチが妻とおぼしき抵抗する女の小太りの剥きだしの尻に鞭打ちの罰を与えている姿をローランドソンが描いている。(19図)この絵は描写の正確さについては疑わしい。というのは、このような所作は手遣い人形には不可能に思えるからだ。ローランドソンは、手遣い人形には何が可能かを正しく理解していないまでも、上演の要のところを把握していたらしく、それゆえに、見るものに訴える虚構の真の力を持ち得たようだ。またコリングズが描いた「イタリア

の人形芝居」(一七八五年)(20図)は若き頃のピッチーニを描いたものだと言われている⁽²⁷⁾。とはいっても、四〇年後にクルクシャンクが描き出したピッチーニの人形とは、かけ離れている。パンチは、とんがり帽子をかぶり糊の効いた飾り襟と袖口にはフリルをつけていて、妻も小綺麗で垢抜けすぎている。一七九五年にアイザック・クルクシャンクが描いた絵(21図)では上演に手回しオルガンを持った男が同行し、若い娘が表向きは帽子で集金、裏では掏摸を働いていた。頭巾をかぶったパンチ氏は虚空を睨みつけるばかりだが、デコルテ姿のジューディは腕を大きく広げ独壇場を演じている。一七九八年にジョハニス・エクシュタインは、丸鼻で帽子も丸いパンチが、小さい角が二本生えてはいるものの魔王というよりはデディベアにそっくりの悪魔と対決している場面を描いている。(22図)一八〇一年にアン・ディブティンがハーバラの市場を描いた版画では、馬鹿帽子「訳註 円錐形の紙帽子。昔、学校で生徒への罰としてかぶらせた」そっくりの帽子をかぶったパンチが、若くきりつとしたジューディが杓子を振りかざすのに向き合っている。(23図)このような多様性は驚くにあたらない。なぜならば、動乱期にあつてはパンチ上演者は、需要の変化や新種の体験に沿うようにと意識的に努めたからである。絵描きたちが実際の正確さに神経をあまり使っていなかったというのが実情に近いにしても、それにもかかわらず、たった十六年の間の多様性はめざましい。

多くの絵にパンチ夫人が登場するが、今日われわれが思い描くよりも、ずっと若くて小綺麗である。その名は、まだジョーンであったようだ。だが手遣い人形パンチの夫人としては、ジューディのほうがたしかにぴたりくる。ジョーンより歯切れがよく、感情的で無遠慮な感じがする。ドルリー・レーン劇場で上演された『ハーレクインの幻』(一八一七年)についてキーツが書いた劇評が、パンチ夫人をジューディと呼んだ最初の例であろう。なかでキーツはパントマイムのパンチとジョーンを誤って「パンチ&ジューディ」と呼んでいるのだが、多分その名前のほうが当時一般的になりつつあったからだろう⁽²⁸⁾。一八二六年には二人の舞台は次のように詳細に描写されていた。

悲しみと喜びの激しい浮き沈みの後に、

抱擁、口論、和解――

……

やっちまった――あの一撃が女を即死させちまった――

さあ寝かしつける――息絶えた死体に

検死が行われる――そしてパンチは――なんと惨めな！

遅すぎた悔恨に苦悩し涙に暮れる。

ところがジユデイは生き返る。

そしてまた抱き合い——争い——別れ——再会する——

笑いは絶えず、通りを揺るがす！

お聞き！パンチの頭がどんなに床に打ちつけられるか！

ご覧、パンチが苦しみ体を擦るか！

そして二人は転げ回る。⁽²⁵⁾

この上演の人形師が、技倆とともに持久力も持っていたのは明らかだ。しかし、パンチとジユデイの間での、反目と同時に愛情もまた、上演には大切である。初期の図にあるように、ジユデイがエレガントでチャームングであるほど劇的效果は大きいのだ。十九世紀になっても、夫が妻を殴ることは法律的には問題はなかったが、下層階級では夫婦間の暴力はまだ解決できない難問であった。法律は道徳家の教えを増強したものだ。一八五七年までは、国会制定法の適用を個別的に受けてのみ、離婚は可能であった。パンチ氏と同じ手段に訴えることで袋小路を抜け出した世の亭主族の数は、いかばかりであったか。ある人が一八二四年に記していた。

わたしの気づいたところでは、尻に敷かれる亭主なら、

君の腕力を喜んで、

輝く理想の洒落者のように仰ぎ見る。

ジユデイの頭を打つたびに数え、

それから家路についてわかるのさ⁽²⁶⁾

女房は、芝居と現実では違うって。

これら初期の上演における悪魔の役割の重要性も確立した。ピッチーニが発展させたような悪魔が登場する場面には、下層階級を導き統制しようとする宗教の圧力を直にはねかえそうとする気配が見える(25図)。一番の脅威の対象である地獄すらも、こんなに

お手軽に扱われたならば、宗教は抑止力にはなりえないだろうに。しかしながら、最後にパンチが勝利をおさめる結末は、昔から今にいたるすべてのパンチ上演者に受け入れられた結末というわけでもなかったことを、付け加えておこう。フロククトンは悪魔に勝利を与えているし、コリアーもストラットも、悪魔が勝利をおさめる上演があったと指摘している。

パンチの敵対者の筆頭がジューディと悪魔であったことは、C・マクスウェル夫人が一八〇〇年から一八〇六年頃に書いた詩によって確認することができる。これは当時の最も重要な文献である。というのは、一つのパンチ芝居を取り上げて、その実際の場面を詳らかに語ったおそらく最初の文献であるからだ。

パンチと奥さん現れて、さあ皆さまのお楽しみ 見てごらん

二人は喧嘩したり踊ったり。

こんなに奇妙な夫婦はめつたに目にするもんじゃない、

旦那はご機嫌、奥方がみがみ

お次は悪魔の登場。強がりパンチとやりあうことに

ご存じ背中の瘤に乗り

ところが大苦戦は悪魔のほう

パンチは悪魔を蹴り出して、踊り続けるばかりさ

お次は英国の誇る、船乗り登場

麗しのスーザンびつたり寄り添い

陽気なホーン・パイプにあわせて踊り、

ステップを踏んでは飛び跳ねる。

続々人形現れて、場面はますます賑やかに

ジェーン・ショアに「訳註 エドワード4世王の愛人。蓮っ葉で浮名を流した」

パン屋に、王も女王も。けれどもパンチがいつでも主役。

パンチの声を聞けば、誰でもわかるさ、そんなこと。⁽³¹⁾

これはフロククトン「パンチの人形芝居」に似ているようだが、パンチを除けば、ジュディと悪魔だけがピッチーニ上演と共通する。「パンチ&ジュディ」初期において、ピッチーニだけが唯一無二であったわけではない、という明らかでない証拠となる。

しかし筋書きがどうであれ、手遣い人形と糸操り人形では、パンチの性質は明らかにたいへん違う。ピッチーニの上演とは非常に趣きは違っているけれども、ここでもパンチは闘い、踊り、滑稽で賑やかしく舞台を支配する。マクスウェル夫人の詩の結びはこうだ。

この芝居について、家に帰って語るだろう、
可哀そうなパンチに見舞った災難の数々を、

いつもパンチは命知らずの敵を倒してきたけれど、
パンチはいつも敵どもを追い払ってきたけれど。⁽³²⁾

糸操り人形のパンチなら、めったなことには杖を振り回せなかったので、このような記憶が残ることはなかっただろう。興味深いことに、『ヨーロッパ・マガジン』（一八一三年）には、「スミスフィールドの旅籠雄羊亭」滞在中にパンチが書いたとする手紙が掲載されている。その中で手遣い人形が糸操り人形の未裔だと主張し、また「あの素晴らしい三日間のどんちゃん騒ぎ……バーソロミュー・フェア」⁽³³⁾をきっかけに、自分に対する鼻屑を取り下げたお偉方たちをなじっている。

マクスウェル夫人の詩の上部には、素朴な木版画が印刷されている（26図）。直方体の背の高い箱舞台に小さな間口がわいて、そこでは長い杖を握るパンチが、鉤鼻で弓なりの細い角を生やした悪魔を睨みつけている。狩猟ラッパを持った集金係^{ポトラ}が、箱舞台の下に立ち、熱心な大人の観客を無遠慮に見ている。マクスウェル夫人は強い口調で述べている。

……このような人たちに、どうかお志しを
日がな一日の身過ぎ世過ぎは厳しいものだから。⁽³⁴⁾

ストラットはマクスウェル夫人と対照的な観察と反応を示している。

今日では人形芝居の興行師は、天気が許せば街を歩き回るが、なんと人形一式と劇場本体までも背中に担いでいるのだ。上演は戸外で行われ、みずばらしい旅芸人の収入は観客のお志し次第であり、頼りないことこの上ないのだが、大抵の人形芝居師のむさくるしい風体を見れば、実入りのほどもたかが知れている。³³

ストラットはまた、「人形芝居の人気は下火になり、通ってくるのは子どもたちだけだ」とも述べている。この発言に真つ向から対立するように、ノレケンズの伝記を書いたスミスは、次のような愚痴をこぼしている。「人だかりの中に立ちながら、パンチの金切り声に分別のある大人が笑い転げるのを何度も見たし、パンチの悪巧みを夢中になって説明するのを何度も聞いた。」³⁴ストラットの発言は、大衆の娯楽を保護することから手を引いた上流階級への抗議の一例として見なされねばならないし、他方、スミスの発言はノレケンズを貶める意図から発している。このようないわくつきの論争のかたわらにあって、マクスウェル夫人の詩は爽快である。

コリアーは折々に見たという場景を記録したが、それが信用できるならば、パンチ芝居の多様性と時事性の証拠となるだろう。たとえば、パンチと英国首席裁判官との会見では、かなり陳腐な答弁の後に、パンチは英国首席裁判官をぶちのめしてしまう。トマス・ミラーが残した同時代の上演記録によれば、「自分に有罪を宣告した裁判官をパンチはベンチからぶつとばした」³⁵とあり、このような場景に事欠かないパンチ&ジューディの精髓の確証となる。さらにいえば、十九世紀前半から残存する人形芝居の道具のうち少なくとも二組に、裁判官の人形が確認されている。とりわけ抑圧的であった裁判官とパンチが接しないほうが奇妙である。

コリアーによると、ある上演では二人以上の妻を持つ利益と不利益について、パンチは青髯公と話し合ったことだ。またパンチは、歴史上実在した人物とも対面している。たとえばネルソンはパンチに「勇者として……フランス軍と戦う手助けをするよう懇願し」、「溺れてしまふ」とパンチは躊躇したが、「決して恐れることはない（ネルソン答えて曰く）、絞首刑となるべく生まれた者は、決して溺れ死ぬことはない」³⁶と珍問答をくりひろげた。コリアーは他にも時事的な場面の記録を残している。

ウエストミンスター区での議員選挙に際して、F・バーデット卿……はジューディと赤ん坊にキスをし、パンチ氏に投票を頼んだ。「ごきげんよう、パンチさん。（と准男爵が声をかける）あなたのご支持を頂きますように。」「わかんないな。（とパンチは応じる）女房に聞いとくれ。そんなことは全部女房まかせにしてるんだ。」「それはそれは。（フランスス卿が続ける）いかがでしようかなジューディ夫人。これはこれは何と可愛らしいお子さんで。うちの子もあやかりたいもんだ。」「お宅のお子さまも、さぞ可愛らしいことございませう、フランスス卿さま。（とジューディが云つ）だつて貴方さまは、宅の主人によく似てらっしゃるんですもの。鼻筋がそんなに素晴らしく通つてらっしゃるんですもの。」「本当に。しかし、ジューディさん、バーデット卿夫人は

貴女に似ておりません。(とフランシス卿は云い添えて、キスをする)。本当に可愛い赤ちゃん。ご丈夫そう。おなかも大丈夫ですか?」「ええ、おかげさまで。ありがとございます。」と答えたジユディは、こんなに物腰のやわらかい心根の親切な候補者のお願いを受け入れざるをえなかった。⁽³⁸⁾

「パンチ&ジユディ」の非政治的性質と同時に内在するラディカリズムをこんなにも端的に表すものはない。フランシス・バーデット卿は、一八〇七年からウェストミンスター区選出の国会議員であり、活動的なタカ派として知られていた。と同時に彼は女性に人気があることでも有名で、それゆえにジユディの心とパンチの一票を獲得したのは、皮肉なことだが、いかにもありそうなことである。

またコリアーは、グリマルディが踊るパンチ芝居を観たと記している。これは後に大いに人気を博す道化ジョーイの先駆けであり、またマクスウェル夫人が観た上演で、踊りが際立った場面になっていたことを思い起こさせる。グリマルディとは、パントマイムの素晴らしい道化である。人形芝居にしばしば登場した道化はスカラムーシュで、フロックトンやピッチーニの上演にも登場したし、街頭の操り人形芝居でもおなじみであった。クルクシャンクは、ホーン『日々の書』(一八二五年)のために、このような人形芝居の挿画を描いたが、ホーンは「我々に昔ながらのおなじみの『パンチ』が、これらすべてより長く生き残るだろう」と簡潔に述べている。⁽³⁹⁾

マクスウェル夫人と同様ホーンもまた、「影絵」芝居を描写している。(28図)「影だけがパンチとその妻のありとあらゆる悪戯や、その他の悪戯や趣向を演じることができると言うのだ。」⁽⁴⁰⁾影絵芝居におけるパンチへの言及は、たったこれだけにしかすぎない。しかし「パンチ&ジユディ」を幻灯機で上演するのは、ヴィクトリア朝にあっては珍しいものではなかった。また一八三〇年に、ある著述家は「パンチ&ジユディの笑劇……一七九五年という昔に……ムアフィールドに据えられた覗きからくりでは、ありふれた演目であったと思う」と述べている。⁽⁴¹⁾「このような見世物は箱に収められて、いまだに田舎を回っており、家の戸口で上演されている」と、この著述家はさらに付け加えている。とはいえ、覗きからくり一般について語っているのか、パンチ&ジユディの覗きからくりについて語っているのかは、曖昧である。一八一八年にホーンのために上演したジョス・レヴァージは、ヴィクトリア朝にも上演を続けたが、フロックトンの「悪魔を引っ張れ、パン屋を引っ張れ、さもなければ秤をごまかし目方を減らして売ったため、籠につめられて地獄に送られたパン屋にふさわしい罰を」という場面を取り入れていた。「パンチ&ジユディ」上演者のなかには、夜間上演向きの別演目として影絵芝居に習熟するものも出てきた。トム・パリスは同じ箱舞台で二種類の上演をした草分けだし、ジム・マックリンや道化のポール・ヘリングや手師ベップ・ドーソンらはみんな、両方上演した。

動物も初期のパンチ芝居にはよく登場した。一七九五年のアイザック・クルクシャンクの絵には、犬が二匹と猿が一匹描かれている。(21図) 猿がパンチと共演していた例は、ピーター・ドールマンがノリツジで「三匹の猿と噴水細工とポリチャネツラからなる人形芝居」を上演した一六七〇年にまで遡ることができる。⁽⁴⁴⁾ フロックトンはグランド・メドレーで猿や犬に芸を披露させていたが、その「素晴らしいニューファウンドランド犬」は、スターの扱いを受けていた。チャップブック『バグの訪問』(一八〇六年)は、人形芝居に基づいたものだが、犬を飼っているパンチはバグという猿を目の敵にしていた。観客のうち少なくとも一人は、このような上演には不満であった。

最近、残念ながら、お話ししなければならぬが、

パンチとその妻の権威が幾分失墜した。

というのは猿と衣装を着けた犬が取り入れられ、

二人を助け、その崇高なる芸術を助けることになったからだ。⁽⁴⁵⁾

後には、ブラックプールのグリーン一家が猫を使い、ランディッドノウのハーバート・コドマンは狐を用いたと名高い。

舞台上で犬は、愛嬌をふりまきパイプをふかす芸などでもできるし(29図) 地方巡業中のパンチ上演者が眠りにつく時には、番犬となる。おまけに、箱舞台の裏を覗きこもつとする野次馬の観客を追い払うのにも役に立つ。「パンチ氏の親方によつて……その愉快な輩の犬の(通常の)名前として」⁽⁴⁶⁾「トービー」が採用されたのは、一八一七年以前のことだ。とはいってもボンペイと呼ばれることもあったし、⁽⁴⁷⁾「バグの訪問」ではタウザーである。推量の域を出ないが「トービー」は、旧約聖書続編でアスマダイが棍棒を振るつのをとつちめたエホバの預言者トビトの犬に由来するかもしれない。犬の調教師を意味する「トービー」から来たと考えるのも、もつともらしい。一六四三年の諷刺パンフレットによると、「ルパート王子の犬その名はパドルと、トービーの犬その名はペツパーとの対話、否、討議」⁽⁴⁷⁾の記録を装っている。さらに付け加えると「トービー」は尻の隠語であり、また、道路の隠語でもあった。追いや剥ぎを意味する「ハイウェイマン」は「ハイトービーマン」とも云った。しかし、通常は大目に見えるべき生き物を指している総称であった。多くのニグロの乞食は「トービー」として知られたし、当時の縁日の「学者豚」もトービーと呼ばれた。

ピッチー二の人形一式を買い取ったパンチ上演者は、犬を出演させ始めたのはバイクだと述べ、バイクの現役時代(一七九五—一八三五年)のトービー犬の栄華について語っている。

トビーが流行し始めたのは、ほんの数年前のことだ。それまでの犬は縫いぐるみで、ほんものの動物を取り入れることを初めてパイクが思いついたのだ。それが大当たりだった。上演はびつくりするぐらい変わったよ。最近までパンチ&トビー芝居とも呼ばれていたくらいさ。三匹も犬を連れて街に出たものだ。そりゃあ素晴らしかったよ。最初は物珍しさで特に目をひいて大成功だった。まあ、今じゃ三匹も使わないけどね。母犬は歌えるってふれこみだったから、生まれた子犬のうち二匹も歌えたよ。トビーは歌ったり、パイプをふかしたりできないと。それにパンチの鼻に噛みついてたり握手したりができないとな。トビーがおとなしい時は、それはパンチの棍棒が怖いだけで、棍棒を置くとすぐに飛びかかっていくよ。パンチがご主人さまじゃないって知ってるからね⁽⁴⁸⁾。

パイクは上演をピッチーニから習っていた。メイヒューのインタビュウを受けた人物によると、パイクは「パンチ上演者としては最高」で、その師ピッチーニを凌いでいるということだ。パンチ用箱舞台で影絵芝居を始めたといわれるパリスなる人物が、パイクと一緒にパンチ用の箱舞台を使い、一八〇七年のバーソロミュー・フェアで犬の芸当を披露した。そして一八一〇年にはパリスは人形芝居を上演した。パイク自身は手品や綱渡りや曲芸を一八二二年から一八三二年にかけて縁日で上演したが、メドレーの一部に「パンチ&ジューデ」を組みこんでいたようだ。「志しの高い人形芝居は落ち目になって、その衰退を尻目に人気絶頂のパンチが浮かれ騒ぐ」⁽⁴⁹⁾この一八一五年頃のバーソロミュー・フェアの描写は、おそらくパイクについての言及だとみなされる。一八二六年には、パイクとチャペルは「大掛かりな舞台を発表した。道化と何人かの男女の役者が、衣装をつけて舞台を練り歩いた。……緩く張った綱の上での踊りや曲芸その他の演目が、ボールの劇場なみに出揃ったが、出来栄はこちらが遙かに上だった」⁽⁵⁰⁾一八二八年には、パイクは幾分意欲をなくしたのか、パンチ芝居を自演するぐらいだったようだ。というのは、バーソロミュー・フェアでのパイクの実入りは四〇ポンドしかなく、そのかたわらで、たとえばウムウエルの巡業動物園は一七〇〇ポンドも稼いでいた。

その年、メルルボーン教会近くでのパイクの上演を、ベンジャミン・ロバート・ヘイドンが素晴らしく色彩豊かな絵に残している（カヴァー、30図）。「パイク創作のパンチネット」は、煙突掃除の少年扮するジャック・イン・ザ・グリーンの踊りと同様、ここでは五月祭の演目の一つになっている。パイクはこのように一世を風靡した後に「落ちぶれていき、救貧院で亡くなった」⁽⁵¹⁾けれども、当時のパンチ上演者には珍しく、ピッチーニと並び、パイクの名を「この国の貴きも卑しきも、後々まで云い伝えた」という。

第四章 一八二〇年代

横丁の角を曲がってくる人々が、さんざん笑いころげたあげくに、そのひそかな楽しみを誰かに伝えたくてたまらないような顔をしておれば、何が起こったのかすぐ分る。たった今、人形芝居がはねたのだ。^①

これは「パンチ&ジューディ」にとって黄金期といえる一時代の始まりに、ハズリットが残した述懐である。黄金期の終わりには、チャールズ・ディブディンが次のように記していた。「街角で、つい立ち止まってパンチを観てしまわないような人には、めったにお目にかかったことがない。——私はといえば、いつも誘惑に屈して見入ってしまう。^②」この一〇年に、パンチ芝居は多くの文学者や文化人から注目されてきたが、ナポレオン戦争「訳註 一八〇四—一八一五年」に続く不況期に適應して人気を保ち続けるためか、下品な毒舌口調はあいかわらずだった。

かつては縁日や遊園地につきものの「グランド・メロディー」に所属することが多かったパンチ上演者も、一八二〇年代の記録から察すると、この頃に独立した興行師になったらしい。このように推察されるのは、おそらく文筆家のような社会階層の人間が、縁日や遊園地を訪れることは少なく、パンチに街で出くわすことが多かったからだろう。という次第で、アイザック・ディズレイリーによると、「街角のパンチ芝居の装備一式」はありふれた光景であり、パンチを「街路と人が集まる都市の申し子」と歌った匿名詩人もおり、「あいかわらずの人気者なのに可哀想に、パンチは蝸牛のように家を背負って街を歩くのに甘んじている」と『日々の書』の記事にもある。

とはいっても、もちろん「パンチ&ジューディ」を見かけるのが街頭だけ、というわけではない。「パンチネッロ」は一八二一年にも遊園地で見ることができたし、一八三三年のクレモーン・ガーデンズの開園式には余興の一つに使われた。一八二八年に、師匠マシューズは、ヴォックスホール・ガーデンズで上演したことを自慢し、同じ頃ベップ・ドーソンのパンチ芝居はワイルドの巡回サーカスに同行していた。パンチ&ジューディは、リングウッドの競馬の日（32図）やホワイト・ホース・ヴェイルで例年行われる「お祭り」^③でも見ることができた。

あたり一带に笛や小太鼓の音、移動舞台の入り口で叫ぶ興行師の太鼓や喇叭の音が鳴り響く。芝居小屋の中で見ることができ、様々な見世物の絵が人目を引いている。その喧噪を貫くかのように、パンチ氏の「ラッタッタ」という金切り声と、相棒のパン・

パイプの音が小止みなしに聞こえてくる。⁶⁾

パズリーの「お祭」の「様々な余興や見世物」の中には

生姜入りクッキーや木の実や……色々な果物の売店があつた。女の子のためには人形など、男の子のためには馬や太鼓や喇叭や鞭など。ワートルローの戦いを見せる覗きからくりや、芝居の見せ場を演ずる自動人形、『森での赤ん坊の死』もある。おまけに永遠の人気者パンチ&ジューディ。舟形ブランコ、バケツ形ブランコ、回転木馬⁷⁾。

これは比較的規模の小さいお祭りであつたが、ノッティンガム・グース・フェアのようなもつと盛大な賑わいでも、パンチ芝居を見かけたものだ。

野獣の檻、芝居、小人、巨人やその他の奇才や見世物、狂気じみた容貌の人間、浮浪者、乞食、ジプシー、歌手、ハーブ弾き、インドの手品師、パンチ&ジューディの上演や、その類の素晴らしい芸人たち⁸⁾。

一八二三年にパーソロミュー・フェアを訪れたある人は、二人づれが「パンチ」と新しい「糸操り人形⁹⁾」の魅力の比較¹⁰⁾を論じあつているのを小耳にはさんでいる。また一八二〇年頃のチャップブック『縁日のお愉しみ』で、余興としてまず第一にあげられているのは「パンチ&ジューディ」である。

まずはパンチ殿、

背中に瘤つき、

おまけにジョーン

はしばみでもかち割りそうな鼻と顎¹¹⁾。

奇妙なことだが、パンチ夫人の名はタイトルでは「ジューディ」なのに、詩の中では「ジョーン」である。おまけに挿画(33図)を見ると、この上演の曖昧さは強まる。はたして役者によるものだったのか、それとも木製の人形によるものだったのか？

「パンチ&ジューディ」が街に出没するのは夏の縁日が始まる前である。ホーンは、春の訪れを「あの愉快な輩『人形芝居のパンチ』の冒険」¹¹に結びつけている。また、『ポケット・マガジン』誌の寄稿家は、パンチは「永遠に春には花咲く」と、いともロマンティックに書いている。要するに多くのパンチ上演者が、ありとあらゆる所で上演していたということだろう。縁日の興行師という印象の強いバイク（メイヒューがインタビュしたパンチ上演者によると「大型馬車で田舎を回っていた」ですら街頭でも上演していたらしく、ヘイドン描くところの絵が残っている（カヴァー、30図）。

一八二〇年代の「パンチ&ジューディ」が、観客を子どもに特に限っていたわけではなかったことが、様々な絵からわかる。むしろ五対一ぐらいの割合で大人が優勢であり、この点は文献上も裏付けることができる。バーナード・ブラックマントルが一八二六年に述べたところでは、「いつもの短い調べを次々にかき鳴らす音」がパンチ芝居を「支度する楽しいしるし」で、

聞こえる範囲内にいる歩行者の運動器官に魔法をかけて、老いも若きも身分はなんであれ、巡回人形芝居に引きつける。観客はまるで魔法に繋がれるように、次々にそこに現れる。¹²

『文芸録』のエッセイストは、パンチ芝居の観客について、特に観客の社会的背景について、考察している。「この世の富とはからきし無縁に見える人々が、声も高らかに声援を送る。」「こざつぱりした身なりの人間も何人か」はいたし、「上流人士も二、三人」はいた。¹³一八二八年にスミートンは「肉屋、煙突掃除人、掏摸、牛乳売り娘、年寄りに若い衆、喚声をあげるミュージンスター地方から来たばかりのアイランド人労働者も何人か、そしてそれから悪ガキども」¹⁴を描写している。ロバート・クルクシャンクの挿画（34図）に「悪ガキども」が描かれていないのは、重要なことかもしれない。

ここで、観客の反応についても述べておく必要がある。ブラックマントルによれば、パンチが登場すると「耳をつんざくような歓声しか聞こえない。」「文芸鏡」にも「下品な冗談や地口をちよつと口にするだけで、やんやの喝采を浴びる。ドルリー劇場でも、こんなに受けはしなかったらう」とある。だが、今日の我々がパンチ芝居に期待するような観客参加については、何の報告もない。

びっくり顔が

期待に喜び輝き、

その上目遣いをたどれば、ほら、

忍び笑いが、まず聞こえ

歯をむきだしの笑い顔——突然の高笑い

お待ちかねの陽気な乱痴気騒ぎ。¹⁶

ジュディを呼び出したり、「後ろにいるぞー」と叫んだりして、観客が参加したような気配はない。反対である。ブラックマントルが「英国のスパイ」で生み出した、がさつだが心温かいマリゴールド長老議員によれば、「パンチが悲劇、喜劇、笑劇、パントマイムのお株を奪っちまった。」彼の娘のビディーは「喇叭の音」が下の通りで聞こえてくると、もっともらしく倦怠を装って「物憂げに云った」。「あら、ママ、……あの汚らしいパンチがまた家の窓の下にやってきたわ。厚かましいっいたらありやしない。」「ビディー、お前は娯楽の分らんやつだな」と父親は云い返した。

ここで上演は次に始まる。

パンチ氏は二フィートの幕から覗き見する。その鉤鼻の先っぽが見えると、愉快な芝居が始まる合図だ。一同にお辞儀をし、昔なじみであるかのように、親しげに挨拶する。

第一場では、パンチの「愛しのジュディが……ありとあらゆる気まぐれな愛と諍いを経験し」そして「まぎれもない家族の徴を負う『授かりもの』」を鉤鼻の父親があやす。次の場面では、パンチが馬に乗り回している。やがてジュディが戻ってきて、再び喧嘩が始まり、ジュディの「嘆きの狂乱」でこの場面は終わる。この後「州長官の代理人とのいさかい」や「シヤラバラ」としか云えない黒人との場面が続く。ジュディの幽霊がパンチのもとにやってきたり(35図)、悪魔が現れては消えたりする。そしてついにジャック・ケッチが絞首台を持ってきて、とうとうパンチを懲らしめるかに見えたが、形勢逆転しケッチが首を吊られてしまう。これはピッチー二の上演に似ているが、同じではない。ピッチー二の芝居には「シヤラバラ」としか云えない黒人も幽霊も登場しないし、絞首刑の場面の直前に警官が現れ、その後、悪魔と対面する。ブラックマントルが描く上演には、トービーもスカラムーシュもポリーもなく、ろくろ首の廷臣や医者や盲人、「二人の男」によるお定まりの棺桶の場面もなく、そしておそらく、赤ん坊を窓から投げ捨てる場面もない。

また、スミスの詩の表現にも相違がある。スミスによると、パンチがジュディを打擲し(赤ん坊についての言及はない)、医者がジュディの担当にやってくる。ところが医者は「鼻をぎゅっつつかまれ」、「頭をぶたれる」。悪魔は登場するが「おとなしくさせら

れる。」しかしついにジャック・ケッチが「演劇的正義」を行使し、パンチは「絞首索にぶらさがらねばならない」¹⁷。

ピッチーニ上演にずっと近いのは、『ポケット・マガジン』誌に掲載された上演である。パンチは登場する前、ベッドにいる様子だ。それもジューディと同衾中のようである。集金係がパンチを呼び、パンチが服を着ているのを見て「かく応答する。『おやおやシャツより前にチヨッキを着るの』と尋ねると、パンチはお洒落な青年のごとく「だってシャツを持ってないんだもの」と答える。登場した時には、妻と子に対する愛情に溢れるように見えたが、やがて「魂に情熱の嵐が吹き荒れ」赤ん坊を窓から投げ捨て、ただちに「妻をぶちのめすという簡便な手段によって離婚した。」それから犬を盗むが、また取りあげられる。そして鐘が鳴る場面になり、パンチは唄を歌ったり音をたてたりをどうしてもやめずにいる。次にパンチは馬を呼び、その馬に投げだされる。医者が登場すると、その歯を蹴りとばす。つかまえられて投獄され、そこから絞首台に連れていかれる。パンチが首吊り役人を吊りつしまつというおなじみの場面があり、最後は悪魔と対決し、またもやパンチが勝利をおさめる。

スミートンの記述もフォン・ピュクレー・ムスカウ公「訳註 一七八五年 一八七一年。現在のドイツ、バッド・ムスカウの貴族。諸国を旅して見聞記を残した」の記述も、直前に活字になったコリアーノピッチーニの上演あら筋と大差はない。スミートンは、パンチが「犬に噛まれ、女房の尻に敷かれ、刃向かわれ、診察され、投獄され、首を吊られ、悪魔にとりつかれる」とのみ語っている。フォン・ピュクレー・ムスカウ公が一八二六年に窓からパンチ芝居を観て記した記録には、いくつか独自のものがある。ジューディはパンチより「年下の」妻で、最初に呼ばれたときには「代わりに飼い犬を送る」。スカラムーシュは「決して人を噛んだことはない」ジューディの愛犬を虐待する理由をパンチに問い質すが、パンチは「犬を苛めたことなどない」と答える。その後で、「パンチは腹を抱えて笑い転げ、踊り回り、無茶苦茶に頭を壁に何度も打ちつける。」そして最後の場面では、悪魔が「長爪をパンチのほうに恐ろしげに延ばす」¹⁸。

これまでのところ一八二〇年代について、また一部ではそれ以前にも遡って概観してきたが、とりわけ注目にあたいするのは、この時期に初めて司直の手に言及している点である。司直を表す登場人物はパンチにたいする端的な公敵を代表し、パンチとの場面はすぐにも非難を浴びそうである。というわけで、時にこのような場面はオブラートに包んだようになる。たとえば、同時代に人気があったイタリアのプルチネツラ芝居師ゲッタナッチオが、警官を諷刺の対象にして好んで上演したのとはまったく対照的だ。警察権力の是非を問う議論は、この時代に頂点を迎えた。ピットが一七八五年に掲げたロンドンの治安維持のための法案は「自由」派の圧力のもとで撤回されたが、しかし一八二九年にはピールの首都警察法案が可決されて、内務大臣の管轄のもとに有給の職員や巡査が組織された。財産保護の必要性の前に「完全なる自由」の伝統は屈したが、この間の議論自体はパンチ芝居では黙殺された。なぜなら「この世の富とはからきし無縁に見える人々」（前掲『文芸鏡』）には影響力の及ぶところではなかったからだ。そのような人々

にとつては首吊り役人のほうがずっと説得力を持つ存在であった。

ジャック・ケッチとのからみの場面をクライマックスまで取っておく上演が多かったことから、ケッチの重要性をはかることができる。「文芸鏡」によると、ケッチを最後に登場させることで「素晴らしい群衆から（エリントンがよく云ったように）拍手喝采は鳴りやまなかった」し、J・T・スミスは「何の気なしに立ち止まって、あの愉快なパンチとジャック・ケッチの掛け合いを楽しんでいる」法律家づれを見かけたと云つ。¹⁹⁾ ブラックマントルはジャック・ケッチを「いにしえのルシファーよりも偉大な男」と呼び、この場面を思い出している。

（パンチの）企みの中でも至高のもので、その喜劇性の極意である……⁽¹⁴⁾ ジョン・ケッチ氏は首を吊られて空中でぶらぶらする——パンチは勝利の叫びをあげる——（そして）人は皆パンチの全面的な勝利を支援する。

実在のジャック・ケッチは、英国史上最も悪名の高い首吊り役人の一人であった。人口に膾炙したバラードや物語では、ジャック・ケッチという名は首吊り役人の代名詞として用いられた。ケッチの同時代人であるジョン・ドライデンによると、「部下はただ首を吊るといふような単純な仕事に関してはできるかもしれないけれども、上手に罪人を死なせてやれるのは夫だけ、とジャック・ケッチの妻は語つた。²⁰⁾」人形芝居に関するかぎり、パンチ氏は人々の仇を討つたのだ。脚を作りつける必要がある人形は、パンチ以外では首吊り役人だけだ。なぜなら「パディントン踊りをする」⁽³⁶⁾ 時に、見てもらわなければいけないからだ。

ジャック・ケッチは家族・国家・宗教という社会を規制する主要な三つの制度を代表する妻・首吊り役人・悪魔の一つにあたる。ジューディとジャック・ケッチと悪魔の三役は長い年月にわたって常にパンチと共にあった。メイヒューがインタビュしたパンチ上演者によると、パンチとこの三役とのからみが「パンチ芝居の原型」とのことである。コリアーの本に追加された絵は、その重要性を語っているように見える。うち二枚は上演中の様子を描いたものだが、一枚は正面から見た絞首刑執行場面で⁽¹³⁹⁾ 図)、もう一枚は背後から見たパンチとジューディの場面である⁽²⁾ 図)。三枚目は柄の長い杓を使って妻と食事をしているパンチを描いており⁽⁴⁰⁾ 図)、パンチ芝居についてのクルクシャンクの解釈を敷衍しているのかもしれない。そして四枚目⁽³⁷⁾ 図)では、パンチに大立ち回りで悪魔を追放させている。

これらのキャラクターは構造的な機能を越えて、民衆の心に多彩な連想をもたらす。異教の儀式は生贄と豊穣を結びつけていた。シェークスピアは「絞首刑も妻を娶るのも、運命だ」という諺を引用したことがあった。²¹⁾ 「ヌーヅング」という俗語は「結婚する」という意味と「首を吊られる」という意味をあわせもつ。また絞首刑判決を受けた者は、結婚式にならう装いを身につける。一七六

〇年にタイバーン処刑場の露と消えたフェラーズ伯爵が着用した「銀糸刺繍を施した明るい色の上下服は、結婚衣装だったと云われている」。「パンチ&ジューディ」が儀式をこのようになぞっているとは云わないまでも、数々の図版や記述を手がかりに、パンチ芝居が人気を獲得していった理由を知るためには、パンチ芝居を育んできた民衆文化に潜在するイメージの領域にまで心を配る必要があるだろう。現在、我々がこのような意味を読み取っているからといって、当時の上演者や観客も同じように感じていたわけではないだろう。このようなイメージの力はしばしば意識下における不安から発している。とはいっても、悪魔がパンチに勝利をおさめた上演で、観客がパンチ上演者にむかって泥を投げつけたのを、コリアーが目撃している。

パンチ&ジューディのからみは「愛と闘争」を組み合わせたもので、例外なく最終的にはパンチが勝利を手にするにしても、二人の関係の核心にも曖昧なものがある。ブラックマントル云うところの「殉死したジューディの亡霊」につけたロバート・クルクシャンクの挿画(35図)では、ジューディが白装束で登場したことに復讐者ジューディが由来する。同じくロバート・クルクシャンクによる「パンチとジューディの行い」(34図)では、長い円錐形の帽子をかぶり、大きな鉤鼻に苦虫を噛みつぶしたような表情を浮かべたジューディは、まるで魔女のように見える。しかしながら、この素晴らしいスケッチの眼目は、赤ん坊である。赤ん坊は「まぎれもない家族の徴を負い」、仰ぎ見る観客めがけて、まっさかさまに放り投げられる。ピッチーニ上演の赤ん坊が、丸顔で腕も短かった(38図)のとは対照的であり、初期のパンチ芝居が多彩であったことの例証となるだろう。

ピッチーニの上演では、ジューディに対するパンチの態度は、ポリーの存在に少なくとも部分的には左右されている。ポリーは他の上演記録には見当たらない。メイヒューがインタビュしたパンチ上演者は一八二五年に仕事を始めたらしいが、「ポリー嬢というのは……パンチの愛人で、お蚕づくしのぜいたくななりだ。ポリーと一緒にいるパンチを、ジューディが目撃したことから一悶着おこる」と語っている。ピッチーニのポリーは、踊ってパンチのキスを受けるだけだが、一七九五年頃の上演では、鐘を鳴らすパンチに抗議する紳士の娘がポリーという設定であった。パンチはその紳士を殺め、そしてコリアーは、レディー・アンへのリチャード三世の求婚にならって、パンチのポリーへの求婚場面を文学趣味豊かにつくりあげている。この台詞の信憑性は不確かだろうが、「パンチとポリーと子犬の芝居」に言及したスコットランドの資料があるので、ポリーの出演が他の上演にもあった証拠となる。『乞食オペラ』のポリー・ビーチヤムに由来するというのも、ありそうなことだ。もしそうなら、これまた危うく絞首刑を逃れるマクヒースとパンチを比較する誘惑にかられる。

ブラックマントルが示唆するように、再三にわたって登場するジューディの幽霊がパンチの罪を絶えず思い出させることで、パンチとポリーとの関係は牽制される。ノー・ボディーと通常呼ばれている骸骨(ただしメイヒューがインタビュしたパンチ上演者はピッチーニ上演での廷臣をノー・ボディーと呼んでいるようだ)とも関係するが、幽霊はパンチを超自然的なものに遭遇させる。このよ

うに肉体を持たないキャラクターは、多くの上演者がそれまで保っていたものに潜んでいた別次元を付け加えている。

ヘクターというパンチの馬はピッチーニの上演に登場したし、またブラックマントルも『ポケット・マガジン』も言及している。コリアーは、パンチがロバのレースで優勝する場面のある上演について語っている。十九世紀を通じて馬が登場した上演を少なくとも幾つかは挙げる事ができる。一八五一年に、ある人は「蹴りで有名なパンチの馬」⁽²⁵⁾について記している。十八世紀には糸操り人形のパンチは、本物であれ人形であれ、様々な動物に騎乗したものだ、これとは話は別である。むしろ曲馬芸に基づいて、当時新しく開花しつつあったサーカスから直接発想を得たと考えられる。たしかに一八〇〇年以前にも、アストリー曲馬劇場で馬上のパンチの姿を見ることができたとし、ずっけて落馬する道化は人気のある見世物であった。

パンチが落馬すると、医者が登場する。医者は民衆劇の医者役につらなると云われており、たしかにお粗末な喜劇の場面のように、医者は死んだ主人公を蘇生させる。しかし当時の医者を直接的に諷刺した気配もある。というのは、医術の修行には主に処刑者の死体が使われるので、この点で首吊り役人を人々に連想させた。そのうえ多くの医者は、貧しく病める者たちの面倒をみるよりも、ジェントリーとして社会的成功をおさめようとしていた。また、医者の科学的な態度は、縁日の薬売りや民間の「智恵」者の地位を脅かすものであった。「医者の頭に一撃加えられること」。アンコールと叫ぶ大衆を見ても、まったく驚かなかつた⁽²⁶⁾とスミスは述べている。

キャラクターとしての黒人は、お仕着せ姿の召使いであろうと不可解な「シヤラバラ」であろうと、奴隷制や黒人下僕の雇用との関連において考察するよりも、エキゾティシズムの現れと捉えるほうが適切である。一七五八年にダブリンで上演された糸操り人形ではムーア人の貴婦人が踊ったり、一七七六年には「ムーア」踊るところのスペイン舞踏サラバンドが人形芝居の定番であった。

(「コリアーによると」一八二〇年代に特有な上演場面としては、ピアス・イーガン作『トムとジェリー』にならって、パンチがうたた寝する夜警をやっつける一場面や、ジョン・ポール作喜劇『ポール・プライ』（一八二五年）からとった一場面がある。ポール・プライは世話焼きのお節小屋で「お邪魔じゃなければいいんですが」とお邪魔する。パンチが満更でもなさそうな娘に云い寄ろうとするまさしくその時に、ポール・プライが「お邪魔をし」、その結果頭をぶち割られる場面を、コリアーは記録している。おそらくこれはコリアーのバラード『パンチの悪戯』に登場する世話焼きな姑の翻案であろうと考えられる。また、場面が展開することに、ろくろ首人形のように少しずつ首が延びて頭を突っこみ、パンチが何をするとところか尋ねるノージー・パーカー夫人にも関係するかもしれない。『ポケット・マガジン』誌によると、「債権者」や「役人」が登場人物に入っているが、その役割については詳しくは述べていない。またピッチーニの上演には盲人も登場したが、「エジプトの砂で目を痛めた」という台詞からも、同情をかわないキャラクターを理解することができる。かの地で英国陸軍はナポレオン軍と戦ったが、多くの乞食は退役軍人を装ったのだ。

もちろんパンチが主役であった。ホーンはパンチを「陽気で磊落、自己充足している」と述べている。フォン・ピュクレー・ムスカウ公によると、パンチは「その名のゆえか、ラム酒やレモンや砂糖なんかでできている……エゴイストの極致、無敵の陽気さですべてを制覇し、法律であれ人であれ、悪魔までも嘲笑う」ということだ。『ポケット・マガジン』誌の寄稿家は、パンチを「真のデモクリトス、世界と世俗の快楽を嘲笑する賢者、誇り高い侮蔑をこめて非難し軽蔑している。ブジャーズディッキウスという匿名詩人は「才気と智慧がパンチにはともに備わっており」「どんなしめめ面をもつこりさせる」と同調している。フォン・ピュクレー・ムスカウ公にとっては、パンチは英国性の典型であり——「イタリアのプルチネツラとは全然違う。」スミートンにとっては、パンチはより広範な「人間性」を代表している。

パンチは気分屋で、あまりにも粗暴で喧嘩早く、死すべき運命についてはトルコ人のように気にかけない。とは云っても——その快活な精神や大胆不敵さに加えて、才知は欠点を補って余りあるではないか……？パンチはたしかに倫理的な人格ではない。しかし、これほど偽善と縁遠いものが、かつてあっただろうか。

このように文筆家たちにとってパンチの暴力性は、ほとんど問題にならなかったようだ。ブラックマントルはパンチを「独断的かつ独善的。やれるものならやってみな式の悶着屋」と呼んでいるが、この表現は忘れがたい。また『ポケット・マガジン』誌の寄稿家はパンチが引き起こす「力強い破壊」を楽しみ、パンチの手にする棍棒は職杖なのか警官の棍棒なのか決めかねて、パンチが敵の「頭をかち割る」時に「腹の皮が抜けるほど笑うことのない者などいるだろうか」と問うている。この寄稿家にとっては「パンチのオペラ」こそは「この世で唯一の完全なる演劇」であって、公開処刑や懸賞試合や「出征」という大衆にとっての娯楽の材料を「優雅に組み合わせ」た「昔ながらに」「変わらぬながら」も古びず、楽しく、また新鮮なものであった。ハズリットは、どんなに出来の悪いパンチ芝居でも「人間生活の笑劇性や仰々しい儀式性」を味わうことができるし、「親指ほどの大きさで顔は極彩色に塗られた、つぎはぎだらけの衣装の人形三体が、きどって歩き、叫び、喚き、歌い、踊り、お喋りし、威嚇し、お互い頭を殴り合い、威張り散らし、そして『いまましいほど人間性を模倣する』」と述べている。

パンチ上演者については、これらの文筆家たちも多くのことを語ってはいない。『モーニング・クロニクル』誌は、パンチの「旅回り芸人の無知と無能」³⁰について意地悪く語っている。ブラックマントルは、それほど手厳しくはないが、「パンチ氏の支度一式には何か異様で途方もないところがある」と述べている。これをブジャーズディッキウスは「高くかかげられた、あの奇妙な幕布のかかった箱、長い四本柱で囲われたもの」と描写した。『文学鏡』のエッセイストはピッチーニを回想して、「がっしりして顔立ちは整っ

ているが、スモックのような服を着て、犬毛帽子をかぶった田舎者じみた若者が」上演したパンチ芝居を一八二〇年頃に観たと書いている。

ロバート・クルクシャンクが描いた集金係ポトラが何人が伝わっている。いずれも年齢は中年までで、喇叭を吹くので頬を膨らませ、たいてい山高帽に派手なタイを締め、トッパーコートの下にはチヨッキを着こみ膝丈のブーツを履くという目立つ格好をしていた。作者不詳ではあるが、当時の水彩画によると(39図)女の集金係ポトラもいたようだが、たぶん上演者の妻だと思われる。『ポケット・マガジン』誌は上演の開始にあたって、パンチ相手に早口にまくしたてる「ほろを着た老いばれ爺い」についてふれている。メイヒューがインタビュした人物は一八二五年に集金係ポトラとして出発したが、この仕事をさしてしなかつたようだ。

その頃は、たしかにあまりお喋りは必要じゃなかつた。まあ登場するキャラクターを呼び出すことぐらいだが、これも親方が舞台裏から「きっかけ」をつけてくれた。⁽³²⁾

『ポケット・マガジン』誌によると、上演が終わると「年老いた案内係」が脱いだ帽子を差し出したが、「心付けを強要することはなかつた」。「懷中に小銭を持っていない人間は」無理にお金をださなくてもよかつた。ハズリットも「ただで」見たという。こんなことは本来ありそうにないことだ。ブラックマントルは「帽子の深さ半分位までが……上機嫌になった観客が出した心付けの銅貨で一杯になつていた」と語っているが、マリゴールド長老議員が先週一シリングやったから、その窓の下で上演しようとするパンチ芝居、というほうが実態に近いのではないだろうか。そして終演後には、「この長老議員殿は太鼓腹をゆさぶり笑いながら、またシリング貨を寄進する」のであつた。

一八二〇年代には「パンチ&ジユディ」芝居はたしかに商売として成り立っていた。ピッチーニは「日に一〇ポンドの実入りがあり、国でも一流の紳士であるかのように、鶏料理にワインをつけてゆっくり食事をした……」⁽³³⁾ことで名高い。コリアーは一回の上演につき二シリングから四シリングの稼ぎがあると算段している。もし夏場に日に一〇回も上演すると、結構な額が稼げるというわけだ。ひどい不況の時代にあつても、パンチ芝居の興行が経済的に採算がとれることが、他のいかなる理由によるよりも、一八二〇年代をパンチ上演者の黄金時代にしたのだ。そしてまたこのことから「パンチ&ジユディ」は色あせることのない不滅の輝きを保証されたのだ。

註

(著者の姓と出版年のみが記されている場合、詳細は文献目録表を参照のこと)

第一章

- (1) Collier, 1828. ユニバーシ上演の以下の要約、本書どの頁数への言及などは、すべてこの初版本による。この年に出版された第二版は、そのユニバーシのある前書きと、かなりの脚註がついている（上演台本は同じであるが）。十九世紀中に少なくとも六刷されたのは、この第一版だけだ。
- (2) Collier, 1872, p.78.
- (3) Cruikshank, G., 'Extract from the Catalogue of the Cruikshank Exhibition' (held at Exeter Hall, 1863), reprinted in Collier, 1828, 6th edition, Bell, 1881, 7th edition, Bell, 1890, etc.
- (4) Collier, 1828, p.89.
- (5) Collier, 1872, p.79.
- (6) Collier, 1828, p.74.
- (7) Collier, 1828, 2nd edition, 1828, p.91.
- (8) Collier, 1872, p.79.
- (9) Anon, 'The Puppet Show', *The Literary Speculum*, No 1, 1821, p.155, reprinted in Oxberry, 1826.
- (10) Cruikshank, loc.cit.
- (11) *The Literary Speculum*, No 1, 1821, pp.154-5.
- (12) Mayhew, 1851, p.53.
- (13) Stead, 1950, p.89.

第二章

- (1) 幾種な形骸のたぐひに Byrom, 1983, 44参照。
- (2) Byrom, 1983, p.18.
- (3) 英国における人形劇の歴史について Speaight, 1955, and Philipott, 1969 44参照。
- (4) Lambarde, W., *Alphabetical Description of the Chief Places in England and Wales*, c.1570, quoted in Hone, 1823, p.225; Speaight, 1955, p.34, etc.
- (5) Shakespeare, W., *Hamlet*, Act 3, Sc 2.
- (6) ヲナーケツシの「親方」オツシに、世に人の人形を置置しぬべし。Jonson, B., *Bartholomew Fair*, Act 5, Sc 1.
- (7) Davenant, W., 'The Long Vacation in London', *The Shorter Poems*, ed. Gibbs, A.M., Clarendon Press, Oxford, 1972, p.129.

- (8) Morley, 1859, p.188.
- (9) *Ibid.*, p.231.
- (10) The Lord Henry Cromwell's Speech in the House, 1659, quoted in Speaight, 1955, p.71.
- (11) Pepys, S., *Diary*, 9 May 1662.
- (12) Dryden, J., *Sir Martin Mar-All*, 1668; Shadwell, T., *The Sullen Lovers*, 1668; Wycherley, W., *The Gentleman Dancing Master*, 1672; Otway, T., *Friendship in Fashion*, 1678; Lawrence, W.J., 'The Immortal Mr Punch', *The Living Age*, vol 308, 22 Jan 1921, pp.243-7. 複製
- (13) Anon, 'The merry Country Maids Answer To the Country Lovers Conquest', quoted in Baskerville, C.R., *The Elizabethan Jig*. University of Chicago Press, 1929, p.358.
- (14) 'My Lord All-Pride', *The Complete Poems of John Wilmot, Earl of Rochester*, ed. Vieth, D.M., Yale University Press, 1968, p.143.
- (15) Duffett, T., *New Songs*, 1676, quoted in Rosenfeld, 1960, p.5.
- (16) Morley, 1859, p.355.
- (17) Anon, 'Punchinello', *Musical Miscellany*, vol vi, 1731, quoted in Collier, 1828, p.38.
- (18) Swift, J., 'A dialogue Between Mad Mullinix and Timothy', *The Poems*, ed. Browning, W.E., Bell, 1910, pp.229-30.
- (19) Quoted in Lawrence, W.J., 'Punch and Judy: A Famous Dublin Show', *The Irish Independent*, 29 Aug 1905.
- (20) *Notes and Queries*, 24 Feb 1877, p.155.
- (21) Fielding, H., *The History of Tom Jones, a Foundling*, 1749, Book XII, ch v.
- (22) Fielding, H., *The Author's Farce*, Act 3, Sc 1.
- (23) Anon, 'Punch and Porter', *The Gentleman's Magazine*, vol viii, Oct 1738, p.542.
- (24) Advertisement quoted in Speaight, 1955, p.109.
- (25) *The Gentleman's Magazine*, March 1816, p.230.
- (26) Quoted in Stead, 1950, p.57.
- (27) *The Literary Speculum*, No 1, 1821, p.156.
- (28) Palmer, R., 'The Devil and Little Mike', *English Dance and Song*, Summer 1984, p.10.
- (29) Ward, E., *The London Spy*, Part VII, 10 May 1699.
- (30) Fielding, H., *The History of Tom Jones, a Foundling*, Bk XII, ch vi.
- (31) 'Politics in Miniature', 1741, quoted in Speaight, 1955, p.171.
- (32) Johnson, S., *The Works of William Shakespeare*, 1765, quoted in Speaight, 1955, p.195.
- (33) Popham, E., *Pupae Gesticulantes*, 1778, trans. Speaight, G., quoted in Speaight, 1955, p.195.

- (34) Quoted in Hone, 1827, p.504.
 (35) Daily Advertiser, 29 March 1748, quoted in Theatre Notebook, vol 7, 1952-3, pp.30-31.
 (36) Quoted in Speaight, 1955, p.112.

操三書

- (1) Thompson, E.P., *The Making of the English Working Class*, revised edition, Penguin, 1968, p.26.
 (2) See Linebaugh, D., 'The Tyburn Riot Against the Surgeons', in Hay, D., et al., *Albion's Fatal Tree*, Allen Lane, 1975, pp.66ff.
 (3) Ure, A., *The Philosophy of Manufactures*, 1835, quoted in Thompson, op.cit., p.398.
 (4) Marsden, J., *Sketches of the Early Life of a Sailor*, n.d., quoted in Thompson, op.cit., p.403.
 (5) Weber, M., *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*, 2nd edition, George Allen and Unwin, 1976, pp.158-9.
 (6) Rogers, S., 'A Wish', *The Oxford Book of English Verse*, new edition, ed. Quiller-Couch, A., Oxford University Press, 1939, p.686.
 (7) Watts, I., 'The Day of Judgement', *The Oxford Book of English Verse*, new edition, ed. Quiller-Couch, A., Oxford University Press, 1939, pp.510-11.
 (8) Marsden, op.cit., quoted in Thompson, op.cit., p.62.
 (9) *The Gentleman's Magazine*, Sept 1815, p.198.
 (10) *Ibid.*, p.200.
 (11) *The Gentleman's Magazine*, Sept 1817, p.272.
 (12) Morley, 1859, p.454.
 (13) *Ibid.*, p.463.
 (14) Anon, 'A Description of the Fair in this Town, and of all the Fairs in England', *The Linnet*, Eyres, Warrington, n.d. (Harding Coll. A.8, no.43), p.6.
 (15) Wood, S., 'A New Song in Praise of the Weavers' broadsheet, c. 1790.
 (16) *Punch*, vol xxvi, 1854, p.223.
 (17) Smith, J.T., 1828, edn. *World's Classics*, Oxford, 1929, p.17.
 (18) *Ibid.*, p.149.
 (19) *Ibid.*, p.71.
 (20) *Morning Chronicle*, quoted in Frost, 1881, pp.200-201.
 (21) The chapbook is reproduced in full in *Theatre Notebook*, vol 7, 1952-3, pp.84-5.

- (22) Strutt, 1801, edn. Tegg, 1834, p.165.
- (23) Grose, F., *Dictionary of the Vulgar Tongue*, Chappell, 1811.
- (24) Anon, 'Bartholomew Fair, sung by Mr Matthews, with unbounded applause', Laurie and Whittle, 1811.
- (25) Egan, P., *Real Life in London*, Sherwood, 1821, ch xxvi.
- (26) Quoted in Speaight, 1955, p.172.
- (27) See Stead, 1950, p.85, and Byrom, 1972, p.10.
- (28) See Speaight, 1955, p.301.
- (29) Bougersdickius, 'Punch and Judy: A Philosophical Poem in Two Cantos', *The European Magazine*, June 1826, p.571.
- (30) Smith, H., 1851, Pt 2, p.116, originally published in *New Monthly Magazine*, vol x, quoted in *The Mirror*, 29 May 1824, p.364, Smeeton, 1828, p.387, etc.
- (31) Maxwell, c. 1806, pp.28-9.
- (32) *Ibid.*, p.31.
- (33) 'Punch's Complaint', *The European Magazine*, August 1813, pp.108-9.
- (34) Maxwell, c. 1806, p.31.
- (35) Strutt, 1801, edn. 1834, p.167.
- (36) Smith, J.T., 1828, edn. 1929, p.150.
- (37) Miller, T., 1852, p.255.
- (38) Collier, 1828, p.61.
- (39) *Ibid.*, p.62.
- (40) Hone, 1826, p.1116.
- (41) Maxwell, c. 1806, p.91.
- (42) *The Gentleman's Magazine*, Sept 1830, p.290.
- (43) Hone, 1823, p.231. See also Scott, Sir W., *Old Mortality*, Blackwood, Edinburgh, 1816, ch.38.
- (44) Rye, W., *Extracts from the Court Books of the City of Norwich, 1666-1688, 1905*, quoted in Speaight, 1955, p.79.
- (45) Bougersdickius, *loc.cit.*
- (46) Smith, J.T., *Vagabondiana*, Arch. 1817, p.25.
- (47) Ashton, J., *Humour, Wit and Satire of the Seventeenth Century*, Chatto and Windus, 1883, p.440.
- (48) Mayhew, 1851, p.62.

- (49) Morley, 1859, p.478.
- (50) Hone, 1826, p.1197.
- (51) Mayhew, 1851, p.57.

挿図脚

- (1) Hazlitt, 1819, p.49.
- (2) Dibdin, C., *Professional and Literary Memoirs*, ed. Speaight, G., *Society for Theatre Research*, 1956, p.138.
- (3) D'Israeli, I., 1822, 'The Pantomimical Characters', edn. Moxon, 1834, vol iii, p.176.
- (4) Bougersdickius, *op.cit.*, p.572.
- (5) Hone, 1827, p.502.
- (6) Hughes, T., *Tom Brown's Schooldays*, Macmillan, 1857, ch 2.
- (7) Lawson, J., *Letters to the Young on Progress in Pudsey*, Birdsall, Stanningley, 1887, pp.31-2.
- (8) Howitt, W., quoted in Illiffe, R., and Baguley, W., *Old Nottingham Goose Fair, a Story in Pictures*, Nottingham Historical Film Unit, 1979, p.4.
- (9) Anon, 'Bartholomew Fair', *Blackwood's Edinburgh Magazine*, vol xiv, Sept 1823, p.261.
- (10) Anon, *Fun From The Fair*, c. 1820, p.1.
- (11) Hone, 1827, p.500.
- (12) All quotations from *The Pocket Magazine* refer to: Anon, 'Punch', *Robin's New and Improved Series of Arliss's Pocket Magazine of Classic and Polite Literature*, 1 Feb 1827, pp.90-96.
- (13) All quotations from *Bernard Blackmantle* refer to: *Blackmantle*, 1826, pp.56-66.
- (14) All quotations from *The Literary Speculum* refer to: Anon, 'The Puppet Show', *The Literary Speculum*, No 1, 1821, pp.152-6.
- (15) All quotations from George Smeeton refer to: Smeeton, 1828, pp.384-9, originally published in *The Literary Gazette*, 9 Feb 1828.
- (16) Smith, H., 1851, Pt 2, p.115.
- (17) *Ibid.*, pp.116-17.
- (18) All quotations from von Pueckler-Muskau refer to: von Pueckler-Muskau, 1831, pp.130-143.
- (19) Smith, J. T., 1828, edn. 1929, p.150.
- (20) Dryden, J., 'A Discourse Concerning the Original and Progress of Satire', *The Satires of Decimus Junius Juvenalis*, 1693, in Ker, W.P., *Essays of John Dryden*, Clarendon Press, Oxford, 1926, p.93.
- (21) Shakespeare, W., *The Merchant of Venice*, Act 2, Sc 9.

- (22) Marks, A., Tyburn Tree, Its History and Annals, Brown Langham, n.d. (c. 1908), p.250.
- (23) Mayhew, 1851, p.58.
- (24) Moir, D.M., The Life of Mansie Waugh, the Tailor of Dalkeith, told by himself, Blackwood, Edinburgh, 1828, ch.iii.
- (25) Anon, 'The History of Puppet-Shows in England', Sharpe's London Magazine of Entertainment, vol. 14, 1851, p.111.
- (26) Smith, H., 1851, Pt 2, p.117.
- (27) Hone, 1823, p.230.
- (28) Bougersdickius, op.cit., p.576, 577.
- (29) Hazlitt, 1819, p.50.
- (30) Morning Chronicle, 28 Jan 1828.
- (31) Bougersdickius, op.cit., p.570.
- (32) Mayhew, 1851, p.52.
- (33) Ibid., p.52.

文献目録

注記：『パンチ and シュニキ』に関する膨大な文献目録を編纂することがそもそも可能であるのか疑わしい。ここに掲げた書物はなんらかの関連性をもちものである。雑誌や新聞の記事となると余りにも多すぎて目録は作りがたい。

雑記型目録

- Boy's Annual, Beeton, 1868.
- The Boy's Own Royal Acting Punch and Judy, Dean, 1861.
- Children's Annual, Blackie, Glasgow, 1922.
- The Comical Drama of Punch and Judy, Wallis, n.d. (c. 1840).
- The Curious History of Punch and Judy, Walker, Otley, 1847.
- Dog Toby and Other Stories, Oxford University Press, 1929.
- Fun From The Fair, Fairburn, n.d. (c. 1820).
- The Funny Story of Punch and Judy, Walker, Otley, n.d. (c. 1840).
- The History of Punch, an Amusing Alphabet, Darton and Hodge, n.d. (c. 1865).

The Life and Adventures of Punchinello, Chapman and Hall, 1846.

The Moveable Punch and Judy, Dean, 1858.

Mr Punch and His Tricks, Raphael Tuck, 1893.

A Picture Story Book, Routledge, 1850.

Pugs Visit, or the Disasters of Mr Punch, Harris, 1806.

Punch and Judy, Books for the Bairns, Stead, n.d. (c. 1900).

Punch and Judy, Catnach, n.d., (c. 1830).

Punch and Judy, Clarke, 1863.

Punch and Judy, Darton and Hodges, n.d., (c. 1865).

Punch and Judy, Lapworth, 1947.

Punch and Judy, National Nursery Library, Warne, n.d. (c. 1875).

Punch and Judy, National Trust, 1983.

Punch and Judy, R.A.PUBLISHING, 1944.

Punch and Judy As Performed in All the Nurseries of Europe, Asia, Africa and America, Dutton, n.d. (c. 1900).

Punch and Judy: Aunt Mavor's Everlasting Toy Book, Routledge, Warne and Routledge, n.d. (c. 1880).

Punch and Judy and their Little Dog Toby, Orr, 1854.

The Punch and Judy Box, Oxford University Press, 1931.

Punch and Judy Picture Book, Routledge, 1873.

Punch and Judy Show, Medallion Press, 1949.

Punch and Judy with Surprise Pictures, Dean, 1875.

Punch and Judy's Children's Annual, Newnes, 1931, 1932, 1933, 1934.

Punch's Merry Pranks, a Little Play for Little People, Tegg, 1857.

Punch's Puppet Show, Sayers, 1792 (misprint for 1772).

Punch's Show, Murray, n.d. (c. 1870).

Punchinello's Picture Book, Routledge, 1882.

The Royal Punch and Judy As Played Before the Queen, Dean, 1850.

A Schoolboy's Visit to London, Wallis, n.d. (c. 1835).

The Serio-Comic Drama of Punch and Judy, Keys, Devonport, n.d. (c. 1835)

- Adams, A. and Leach, R., *Punch and Judy Playtexts*, Harrap, 1978.
- Adams, A. and Leach, R., *The World of Punch and Judy*, Harrap, 1978
- Adams, A., Leach, R., and Palmer, R., *Feasts and Seasons*: Summer, Blackie, Glasgow, 1978.
- Aiken, C., *Punch: The Immortal Liar*, Martin Secker, 1921.
- Anderson, M., *Heroes of the Puppet Stage*, Cape, 1924.
- Baird, B., *The Art of the Puppet*, Collier-Macmillan, 1965.
- Baker, F., *Playing With Punch*, Boardman, 1944.
- Baretti, G., *Tolondron, Speeches to John Bowle About His Edition of Don Quixote*, Faulder, 1786.
- Baring, M., *Punch and Judy and Other Essays*, Heinemann, 1924.
- Barrie, J.M., *Sentimental Tommy*, Cassell, 1896.
- Beard, L. and A., *Things Worth Doing and How To Do Them*, Scribner, New York, 1906.
- Beaumont, C., *Puppets and Puppetry*, Studio, 1958.
- Bellew, F., *The Art of Amusing*, Carleton, New York, 1866.
- Bergonzini, R., Maletti, C., and Zagaglia, B., *Burattini e Burattinai, Mundici e Zanetti*, Modena, 1980.
- Binzen, B., *Punch and Jonathon*, Macmillan, 1970.
- Blackmantle, B., *The English Spy, vol ii*, Sherwood, Gilbert and Piper, 1826.
- Blanchard, C.W., *The Suitcase Theatre*, Devereaux, 1946.
- Bohmer, G., *Puppets Through the Ages*, Macdonald, 1971.
- Bragaglia, A., *Pulcinella*, Casini, Rome, 1953.
- Byrom, M., *Punch and Judy, Its Origin and Evolution*, Shiva, Aberdeen, 1972.
- Byrom, M., *Punch in the Italian Puppet Theatre*, Centaur Press, 1983.
- Byron, H.J., *Punch*, French, n.d. (c. 1885)
- Calthrop, D.C., *Punch and Judy, a Corner in the History of Entertainment*, Dulau, 1926.
- Carrington, N. and Hutton, C., *Popular English Art*, Penguin, 1945.
- Carruth, J., *Punch and Judy Gift Book*, Odhams, 1970.
- Catto, M., *Punch Without Judy*, George Allen and Unwin, 1940.
- Chambers, R., *The Book of Days*, Chambers, Edinburgh, 1863.
- Clarke, A., *The Story of Blackpool*, Palatine Books, 1923.

- Cohen, D., and Greenwood, B., *The Buskers. A History of Street Entertainment*, David and Charles, Newton Abbot, 1981.
- Collier, J.P., *An Old Man's Diary, Forty Years Ago*, vol 4, Collier, 1872.
- Collier, J.P., *The Tragical Comedy or Comical Tragedy of Punch and Judy*, Prowett, 1828.
- Crane, T., and Houghton, E., *London Town*, Ward, 1883.
- Creegan, G., *Sir George's Book of Hand Puppets*, Follett, 1966.
- Currell, D., *The Complete Book of Puppetry*, Pitman, 1974.
- Daiken, L., *The World of Toys*, Lambarde Press, 1963.
- Damon, S.F., *Punch and Judy at Annisquam*, Barre, USA, 1957.
- De Hempey, S., *How to Do Punch and Judy*, Andrews, 1942.
- Dibdin, C., *Observations on a Tour Through Almost the Whole of England, and a Considerable Part of Scotland*, vol 1, Goulding, n.d. (c. 1802).
- Dickens, C., *The Old Curiosity Shop*, Chapman and Hall, 1841.
- DIsraeli, I., *Curiosities of Literature*, Murray, 1822.
- Dore, G., and Jerrold, B., *London, a Pilgrimage*, Grant, 1872.
- Douglas, E., *Punchinello and His Wife*, Judith, Chelmsford, 1886.
- Duchartre, P.L., *The Italian Comedy*, Harrap, 1929.
- East, J.M., *'Neath the Mask*, George Allen and Unwin, 1967.
- Eaton, S., and Bridle, M., *Punch and Judy in the Rain*, Hamish Hamilton, 1984.
- Edwardes, M., *The Reverend Mr Punch*, Mowbray, 1956.
- 'Edwin', *Hallo, Mr Punch*, Supreme Magic Co., Bideford, 1963.
- Emberley, E., *Punch and Judy*, Little, Brown, Boston, USA, 1965.
- Feasey, L., *Old England At Play, Old Plays Adapted for Young Players*, Harrap, 1943.
- Feuillet, O., *The Story of Mr Punch*, Dent, 1930.
- Ficklen, B.A., *A Handbook of Fist Puppets*, Stokes, New York, 1935.
- Fraser, P., *Punch and Judy*, Batsford, 1970.
- Frost, T., *Circus Life and Circus Celebrities*, Tinsley, 1875.
- Frost, T., *The Old Showmen and the Old London Fairs*, Chatto and Windus, 1881.
- Fyfe, R., *Punch and Judy*, Methuen, 1944.
- Gervais, A.C., *Marionettes et Marionettistes de France*, Bordas, Paris, 1947.

- Goaman, M., *Judy and Andrew's Puppet Book*, Faber, 1952.
- Goodfellow, C., *Puppets*, H.M.S.O., 1976.
- Gosse, E., *Father and Son*, Heinemann, 1907.
- Grandgent, C.H., *The Tragical Comedy or Comical Tragedy of Punch and Judy*, George Allen and Unwin, 1928.
- Green, T., *Professional Punch*, Supreme Magic Co., Bideford, 1975.
- Guest, C.H., *Punch's Boy*, Hutchinson, 1942.
- Guette, R., *Marionettes de tradition populaire*, Cercle d'Art, Brussels, 1950.
- Hambling, A., *Punch and Judy*, Hambling, 1938.
- Harsent, D., *Mr Punch*, Oxford University Press, 1984.
- Hazlitt, W., *Lectures on the English Poets*, Taylor, 1819.
- Hendry, H., *Merry Mr Punch*, Grant Richards, 1902.
- Henley, L.C., *Punch and Judy: Aunt Louisa's London Toy Books*, Warne, 1890.
- Hoban, R., *Riddley Walker*, Cape, 1980.
- Hoben, A.M., *The Beginner's Puppet Book*, Noble, New York, 1938.
- Hoffmann, Professor, *Drawing Room Amusements and Evening Party Entertainments*, Routledge, 1879.
- Holbrook, D., *Thieves and Angels, Dramatic Pieces for Use in Schools*, Cambridge University Press, 1962.
- Hone, W., *Ancient Mysteries Described*, Hone, 1823.
- Hone, W., *The Every-Day Book*, Tegg, 1826-7.
- Hornby, J., *The Puppet Theatre and No Show Without Toby*, Blackie, Glasgow, 1952.
- Howe, E., *The Complete Ball-Room Handbook*, Williams, Boston, USA, 1858.
- Hubbard, O.B., *O.B. Hubbard's Celebrated London Punch and Judy*, Lawrence, New York, 1874.
- Hurd, M., *Mr Punch*, Novello, 1971.
- Hutton, C., *Punch and Judy, an Acting Book*, Puffin, 1942.
- Hyman, E., *Punch and Judy, a Comedy of Living*, Constable, 1927.
- Inverarity, R.B., *Manual of Puppetry, Binforde and Mort*, New York, 1936.
- John, D., *St George and the Dragon and Punch and Judy*, Puffin, 1966.
- Jones, B., *The Unsophisticated Arts, Architectural Press*, 1951.
- Jones, J., *Glove Puppetry*, English Universities Press, 1957.

Joseph, H., *A Book of Marionettes*, Viking Press, New York, 1931.

Judd, W.J., *The Tragical Acts or Comical Tragedies of Punch and Judy, Ventriloquism and Comic Songs, Popular Entertaining*, New York, n.d. (c. 1880).

Kennard, J.S., *Masks and Marionettes*, Macmillan, 1935.

Kennedy, J., *Punchinello*, Hutchinson, 1935.

Knight, C., *London*, vol 1, Knight, 1841.

Lambert, M., and Marx, E., *English Popular Art*, Batford, 1951.

Law, A., *Punch and Judy, Happy Hours*, New York, n.d. (c. 1875).

Lee, M., *Puppet Theatre*, Faber, 1958.

Leydi, R., and R.M., *Marionette e Burattini*, Ediz. Avanti, Milan, 1958.

Lind, W.M., *The Crest Punch and Judy*, Whitmark, n.d. (c. 1905).

Lucas, E.V., *Mr Punch's Children's Book*, Punch, n.d. (c. 1910).

McKeechnie, S., *Popular Entertainment Through the Ages*, Sampson, Low, Marston, n.d. (c. 1932).

Mackenzie, C., *Kensington Rhymes*, Secker, 1912.

McPharlin, P., *The Puppet Theatre in America*, Ohio University Press, 1949.

Magnin, C., *Histoire des marionettes en Europe*, Levy Frères, Paris, 1852.

Maindron, E., *Marionettes et Guignols*, Juven, Paris, 1910.

Malin, M.R., *Traditional and Folk Puppets of the World*, Yoseloff, 1978.

Maris, R., *The Punch and Judy Book*, Gollancz, 1984.

Martin, W., and Vallins, G., *Carnival*, Evans, 1968.

Masefield, J., *The Box of Delights*, Heinemann, 1935.

Maxwell, C., *Easter, a Prose and Poetical Description of all the Public Amusements of London*, Arliss, n.d. (c. 1806).

Mayhew, H., *London Labour and the London Poor*, vol iii, Griffin Bohn, 1851.

Miller, D.P., *The Life of a Showman*, Lacy, n.d. (c. 1860).

Miller, M., *Great Fun for our Little Friends*, Sampson Low, 1862.

Miller, T., *Picturesque Sketches of London Past and Present*, Ingram, 1852.

Monckton, E., and Webb, C., *Dog Toby*, Warne, 1957.

Morley, H., *Memoirs of Bartholomew Fair*, Chapman and Hall, 1859.

Moses, M.J., *A Treasury of Plays for Children*, Little, Brown, Boston, USA, 1921.

- Murray, D.L., *A Tale of Three Cities*, Hodder and Stoughton, 1940.
- Odin, G., *Puppets, Past and Present*, Institutes of Arts, Detroit, USA, 1960.
- Oxberry, W., *Dramatic Biography*, vol v, Simpkin, 1826.
- Philpott, A.R., *Dictionary of Puppetry*, Macdonald, 1969.
- Philpott, A.R., *Eight Plays for Hand Puppets*, Garnett Miller, 1968.
- Pope, J., *Punch and Judy*, Ward Lock, 1933.
- Priestley, H.E., *Six Little Punch Plays*, Priestley, 1956.
- Pruslin, S., and Birtwistle, H., *Punch and Judy*, Universal Editions, 1974.
- Richardson, J., *The Book of the Seaside*, Beaver, 1978.
- Richmond, E.T., *Punch and Judy*, French, 1899.
- Rose, A., *The Boy Showman and Entertainer*, Routledge, 1909.
- Rosenfeld, S., *The Theatre of the London Fairs in the Eighteenth Century*, Cambridge University Press, 1960.
- Routledge, E., *Every Boy's Book*, Routledge, 1856.
- Sala, G., *Things I Have Seen and People I Have Known*, Cassell, 1894.
- Sala, G., *Twice Round the Clock*, Kent, 1859.
- Sayer, R., *The Foundling Chapel Boy*, Sayer, n.d. (c. 1815).
- Sheldon, M.S., *The Land of Punch and Judy*, Revell, New York, 1922.
- Simmen, R., *The World of Puppets*, Phaidon, 1975.
- Sims, G.R., *Living London*, vol 2, Cassell, 1902.
- Smeeton, G., *Doings in London*, Smeeton, 1828.
- Smith, H., *The Poetical Works*, Colburn, 1851.
- Smith, J.T., *Nollekens and His Times*, Colburn, 1828.
- Smith, Professor, *The Book of Punch and Judy*, Hamley's, 1906.
- Speaight, G., *The History of the English Puppet Theatre*, Harrap, 1955.
- Speaight, G., *Juvenile Drama*, Macdonald, 1946.
- Speaight, G., *Punch and Judy, a History*, Studio Vista, 1970.
- Stead, P.J., *Mr Punch*, Evans, 1950.
- Stonier, G.W., *Pictures on the Pavement*, Joseph, 1955.

Strutt, J., *The Sports and Pastimes of the People of England*, White, 1801.

Taylor, V., *Reminiscences of a Showman*, Allen Lane, 1971.

Tearle, P., *Punch and Judy Puppets*, Dryad Press, n.d. (1953).

Thorndike, R., and Arkell, R., *The Tragedy of Mr Punch*, Duckworth, 1922.

Tickner, P.F., *The Story of Punch and Judy*, Morice, 1941.

Tuer, A.W., *Pages and Pictures from Forgotten Children's Books*, Leadenhall Press, 1899.

'Uncle Jonathan', *Walks Around London*, Kelly, 1895.

Von Boehn, M., *Dolls and Puppets*, Harrap, 1932.

Von Pueckler-Muskau, H.L.H., *Tour in England*, Wilson, 1831.

Wall, L.V., White, G.A. and Philipott, A.R., *The Puppet Book*, Faber, 1950.

Weatherley, F.E., *Punch and Judy and Some of their Friends*, Ward, n.d. (c. 1885).

West, M., *Punch and Judy at Home*, Longmans, 1958.

West, M., *Punch and Judy Away*, Longmans, 1959.

Westausser, L., *Monsieur Polichinelle, Nouvelle Librairie de la Jeunesse*, Paris, n.d. (c. 1890).

Whanslaw, H.W., *Everybody's Theatre*, Wells, 1923.

White, R., *Punchinello's Romance*, Innes, 1892.

Wild, S., *The Original, Complete and Only Authentic Story of 'Old Wild's'*, Vickers, n.d. (c. 1888).

Wilkinson, W., *The Peep Show*, Bles, 1927.

Wilkinson, W., *Puppets in Yorkshire*, Bles, 1931.

Wilkinson, W., *Vagabonds and Puppets*, Bles, 1930.

Williams, E.C., *Punch and Judy*, Books and Pictures Publications, 1951.

Williams, H.L., *Snip, Snap, Snorum*, Hurst, New York, n.d. (c. 1885).

Wilson, N.S., *Punch and Judy*, French, 1934.

Wiltshire, N., *A Helping of Punch*, Supreme Magic Co., Bideford, 1969.

Woodenscove, P., *The Wonderful Drama of Punch and Judy*, Ingram, 1854.



図1 ジョージ・クルクシャンク「ピッチーニのパンチ」



図2 パンチ&ジュディを上演するピッチーニ

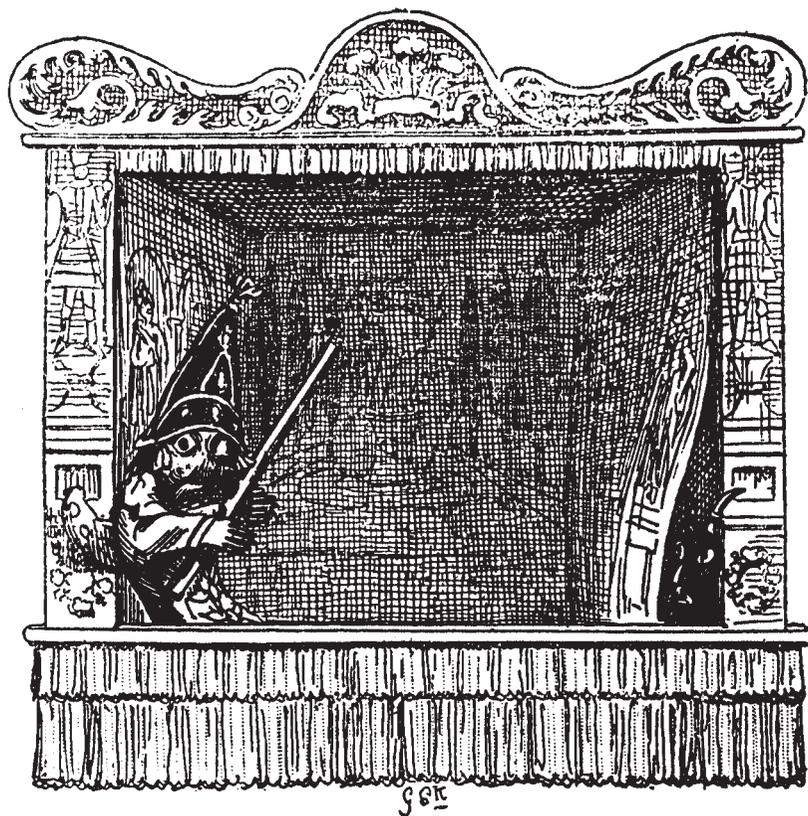


図3 覗き見る悪魔

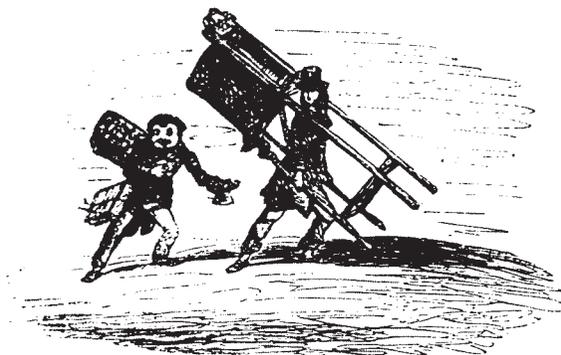


図4 旅のパンチ



図5 プルチネッラ

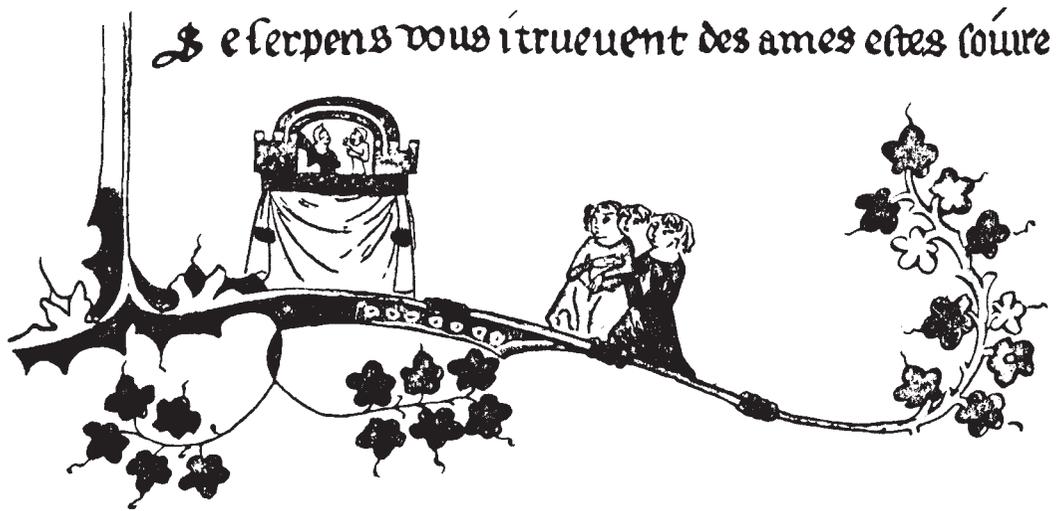


図6 14世紀の手遣い人形『アレグザンダーのロマンスより』



図7 マーティン・ポウエルとパンチとパンチ夫人 1715年頃



図8 「フェアで最高の舞台」で役者によって演じられるパンチ 前景は道化師の楽隊



図9 ウィリアム・ホーガース「1733年サザーク・フェア」細部 右手には手遣い人形の舞台 中央には車を押すパンチ そして階上ベランダには馬上のパンチ



図 10 ジェイムズ・ギルレイ「国家的ペテン師」

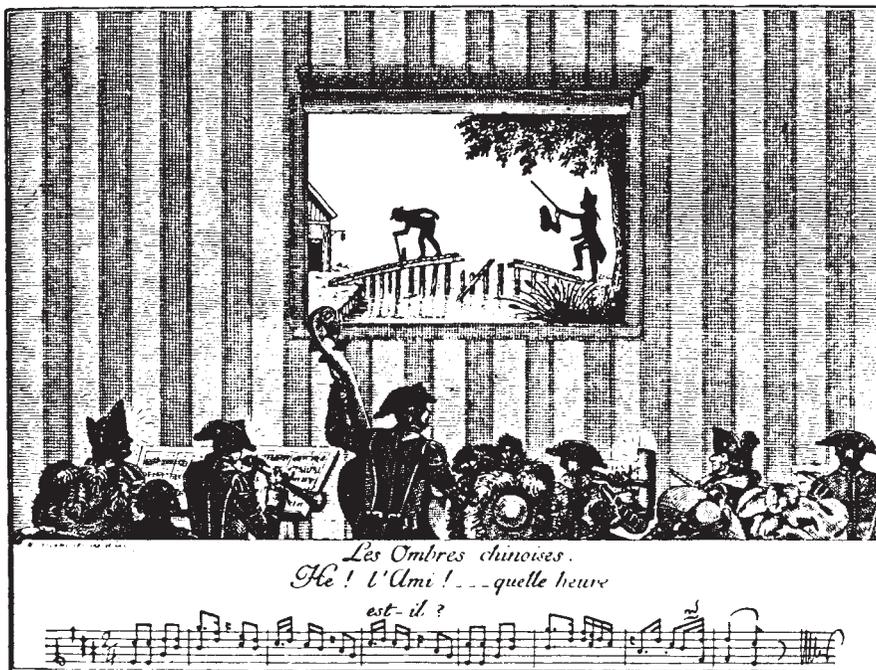


図11 流行の影絵劇



図12 サミュエル・フットのマリオネットと役者の共演舞台 1773年ヘイマーケット劇場



図 13 トマス・ローランドソン 「街頭のパンチ&ジュディ」 1798年頃

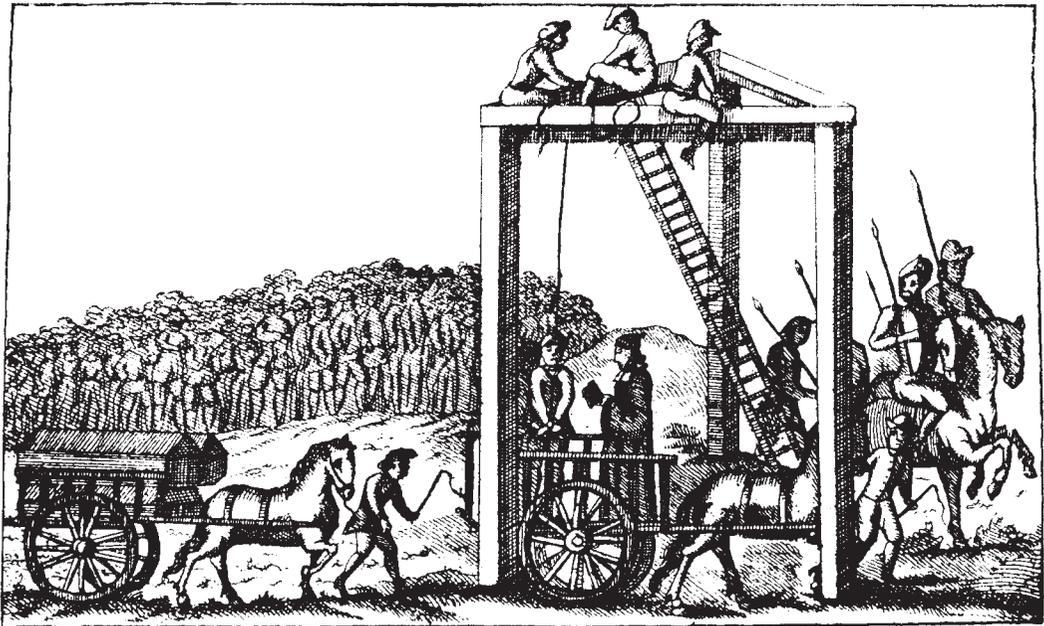


図 14 タイバーンの絞首刑台



図15 縁日での芝居がかりの説教師 1800年頃



図 16 縁日 [上から 2 行目 右から 2 列目にパンチ]

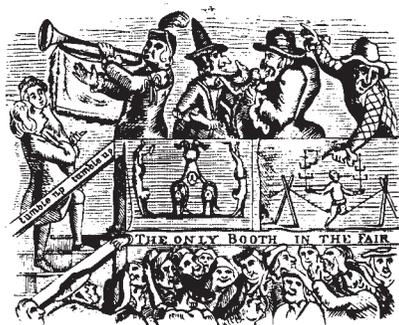


図17 縁日でのフロクトンの演目



図18 雄牛がバーソロミュー・フェアに突入する 1811年



図19 トマス・ローランドソン「デットフォードに向かう王と王妃」1785年 部分



図20 サミュエル・コリングズ「イタリアの人形芝居」1785年



図21 アイザック・クルクシャンク「パンチの人形芝居」1795年



図22 ジョハニス・エクシュタイン「パンチと悪魔」1798年

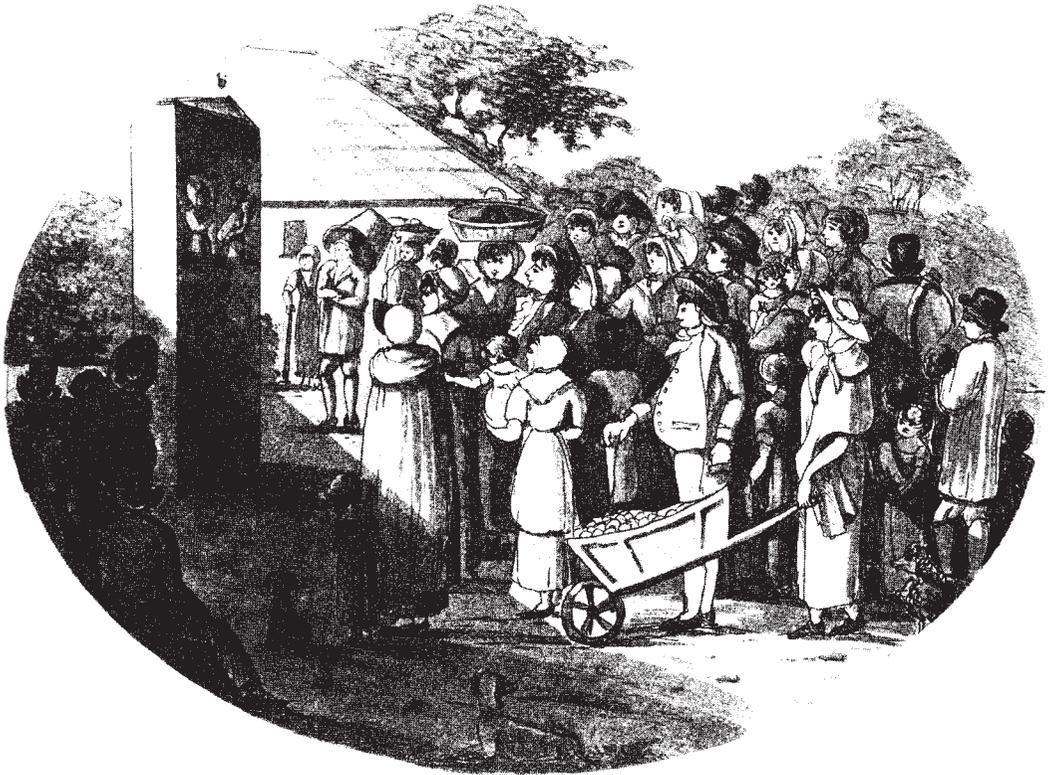


図 23 アン・ディプティン「人形芝居」1810年



図24 ジョージ・シャーフ「スケッチ」中央にはパンチと若いジュディ
(おそらくマリオネット) 右上では赤ん坊を放り投げている



図 26 パンチと悪魔 1806 年頃

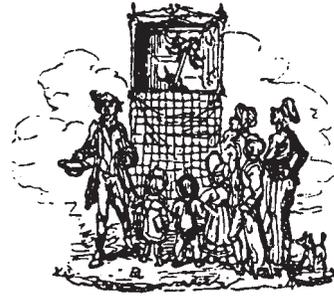


図 25 ジョージ・クルクシャンク 「悪魔がパンチをやつつける」 1824 年

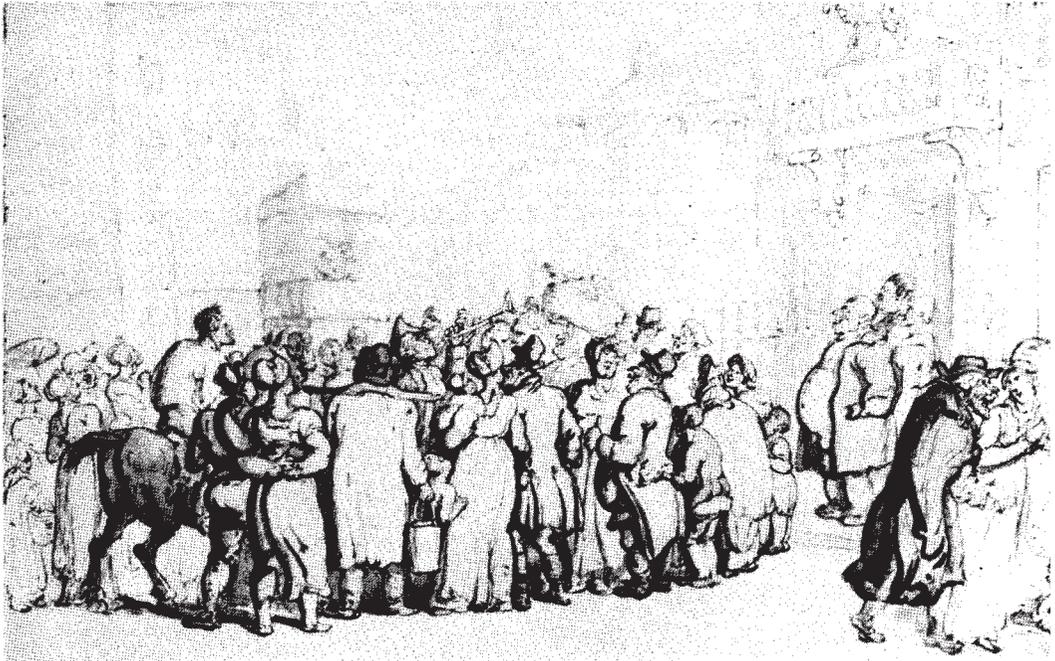


図 27 トマス・ローランドソン 「街頭パンチ芝居」 1800 年頃



図29 トービー犬がパイプを吸う



図28 幻灯のパンチとその妻 1806年頃



図30 ベンジャミン・ロバート・ヘイドン「パンチあるいは五月祭」1828年



図 31 商売敵は気の合わぬもの



図 32 C.J.グリフィス「リングウッド競馬の日」1820年頃



図33 縁日のお楽しみ 1820年頃



図34 ロバート・クルクシャンク「パンチとジュディの行い」



図 35 ロバート・クルクシャンク「偉大なる役者すなわち栄光のパンチ氏」 1826 年
ブラックマントル『英国のスパイ』挿画 パンチと幽霊の場面 マリゴールド
長老議員とその家族が窓から見物している 観客はローランドソンのスケッチ
(27 図) を借りている



図36 パディントン踊り ジョージ・クルクシャンク「ピッチーニの上演」



図37 ジョージ・クルクシャンク「パンチが悪魔を追い払う」

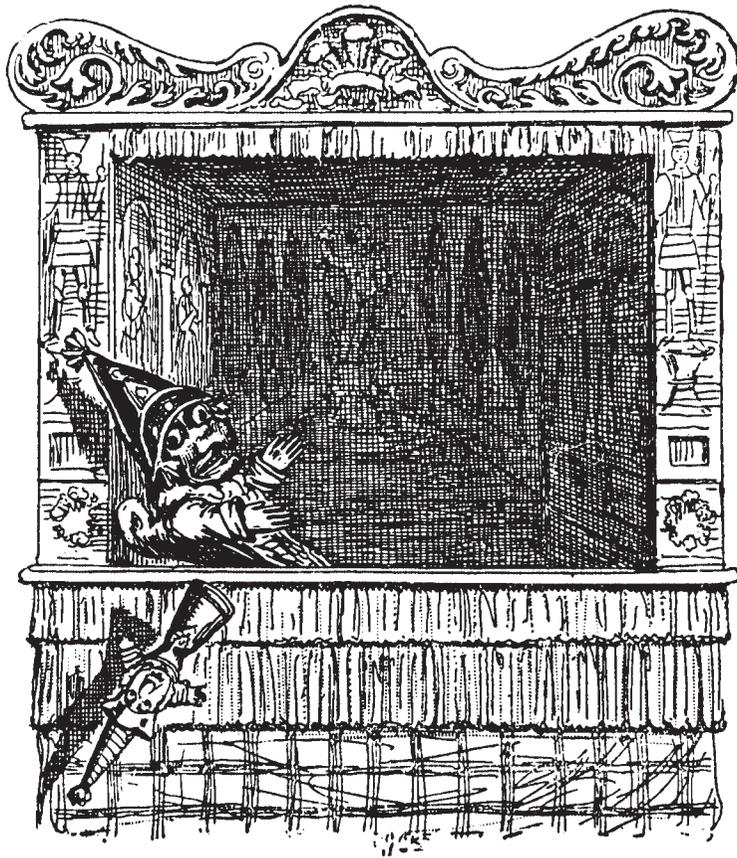


図 38 ジョージ・クルクシャンク「ピッチーニのパンチが赤ん坊を舞台から放り投げる」

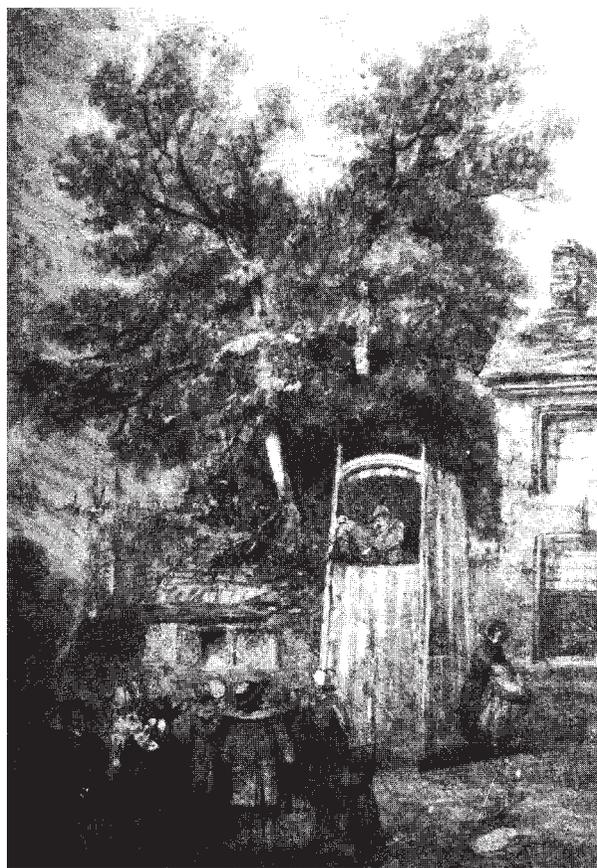


図39 作者不詳 水彩画「田舎でのパンチ」1825年頃



図40 ジョージ・クルクシャンク「パンチとジュディの食卓」